

島根県出雲市大社町

五反配遺跡

(平成16年度調査)

古代出雲歴史博物館建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書



2005年3月

島根県教育委員会

島根県出雲市大社町

五反配遺跡

(平成16年度調査)

古代出雲歴史博物館建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書

2005年3月

島根県教育委員会

序

島根県教育委員会は、平成13年度から、古代出雲歴史博物館建設予定地内における埋蔵文化財の発掘調査を行っています。この報告書はそのうち平成16年度に実施した出雲市大社町杵築東地内五反配遺跡の発掘調査結果をとりまとめたものです。

出雲平野一帯は県内でも有数の遺跡の宝庫であり、原始・古代の遺跡が数多く存在しています。木遺跡は出雲平野のはば北西端に位置し、古墳時代前期を中心とする多数の遺構と遺物が見つかりました。

このうち特に注目されるのが、古墳時代前期を中心とする溝から、その護岸として機能したと考えられる杭列や矢板列、木組の遺構が検出された点です。当時の上木技術を明らかにする遺構を始め、生活様式の検討などに繋がる多数の木製品などの貴重な遺物も得られました。

本報告書がこの地域における人々の暮らしや、それを取り巻く自然の営みを後世に伝える基礎的資料として役立てば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査にあたり御協力いただきました、地元の方々並びに関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

平成17年3月

島根県教育委員会

教育長 広沢 卓嗣

例　　言

1. 本書は、島根県教育委員会が平成16年度に実施した古代出雲歴史博物館建設予定地内埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
2. 発掘調査地は下記のとおりである。

島根県出雲市大社町杵築東99-4ほか　五反配遺跡
3. 調査組織は下記のとおりである。

調査主体　島根県教育委員会
平成16年度　現地調査
〔事務局〕山根正巳（島根県教育庁埋蔵文化財調査センター所長）、卜部吉博（副所長）、永島静司（総務G課長）、川原和人（調査第1G課長）、廣江耕史（総務G主幹）日高陽生（総務G主幹）
〔調査員〕仁木　聰（主事）
〔調査補助員〕伊藤悟郎
〔発掘協力者〕浅沼政試、岩橋孝典、小塚誠治、平石充、深田浩、増田浩太、日次謙一、守岡利榮（以上、古代文化センター職員）
4. 掘図で使用した方位は、測量法による第3座標系X軸方向を指し、平面直角座標系は日本測地系による。レベル高は海拔を示す。
5. 国版は埋蔵文化財調査センター林健亮、廣江耕史、松尾充晶が協力し、仁木が撮影した。
6. 本書に掲載した実測図は調査員と整理作業員が行った。
7. 遺物整理作業・報告書作成作業は調査員と整理作業員が行った。
8. 本書の執筆は第5章を除き調査員が行い、その文責を目次に記した。また、第5章第1節については伊東降夫氏（京都大学木質研究所）に御執筆いただいた。ただし、執筆者の了解のもと、体裁を一部改変して掲載している。
12. 平成14年度発掘調査で文化財調査コンサルタント株式会社（渡辺正巳）に委託した自然科学分析の成果を、第5章第2節に収録した。
13. 本書の編集は各調査員の協力を得て、仁木が行った。
14. 本書掲載の出土遺物及び実測図、写真などの資料は、島根県教育庁埋蔵文化財調査センター（松江市打出町33番地）で保管している。

凡　　例

1. 本文、掲図および写真図版の番号は一致する。
2. 土器の時期決定は主として以下の文献を参考に行った。

松本岩雄1992「出雲・隠岐地域」『弥生上器の様式と編年』山陽・山陰編』木耳社

田辺剛三1981『須恵器大成』角川書店

大谷晃一1994「出雲地域の須恵器の編年と地城色」『島根考古学会誌』11　島根考古学会

大谷晃二2001「土石堂古墳と出雲西部の横穴式石室」「土石堂古墳群」平田市教育委員会

本文目次

第1章 調査に至る経緯と経過	(1)
第2章 五反配遺跡周辺の環境	
第1節 地理的環境	(2)
第2節 歴史的環境	(2)
第3章 調査の方法と概要	
第1節 調査区の設定と調査方法	(5)
第2節 調査成果	(8)
第4章 検出した遺構と遺物	
第1節 調査I区	(9)
第2節 調査II区	(11)
第3節 調査III区	(14)
第4節 小結	(14)
第5章 自然科学的分析	
第1節 五反配遺跡出土木製品の樹種	伊東隆夫 (25)
第2節 五反配遺跡発掘調査における自然科学分析(2)	渡辺正巳 (28)

挿図目次

第1図 五反配遺跡の位置	
第2図 出雲平野周辺の主な遺跡 ($S = 1/100,000$)	
第3図 五反配遺跡調査区 ($S = 1/2,500$)	
第4図 五反配遺跡調査区配置図 ($S = 1/400$)	
第5図 五反配遺跡遺構配置図 ($S = 1/400$)	
第6図 五反配遺跡基本土層図(1) ($S = 1/80$)	
第7図 五反配遺跡基本土層図(2) ($S = 1/80$)	
第8図 調査I区遺物出土状況 ($S = 1/200$)	
第9図 調査II区遺構・遺物検出状況 ($S = 1/200$)	
第10図 調査II区遺物出土状況 ($S = 1/30$)	
第11図 調査II区矢板・杭列立面図 ($S = 1/30$)	
第12図 調査III区遺構・遺物検出状況 ($S = 1/200 \cdot S = 1/40$)	
第13図 調査I区出土遺物(1・2は $S = 1/4$ 、3~7は $S = 1/3$ 、8は実物大)	
第14図 調査II区出土木製遺物(1)(1は $S = 1/2$ 、2~4は $S = 1/4$)	
第15図 調査II区出土木製遺物(2) ($S = 1/8$)	
第16図 調査II区出土木製遺物(3)(1~5は $S = 1/8$ 、6~7は $S = 1/16$)	
第17図 調査III区出土木製遺物(1~3は $S = 1/4$ 、4は $S = 1/8$)	
第18図 13Tの花粉ダイアグラム	
第19図 14Tの花粉ダイアグラム	

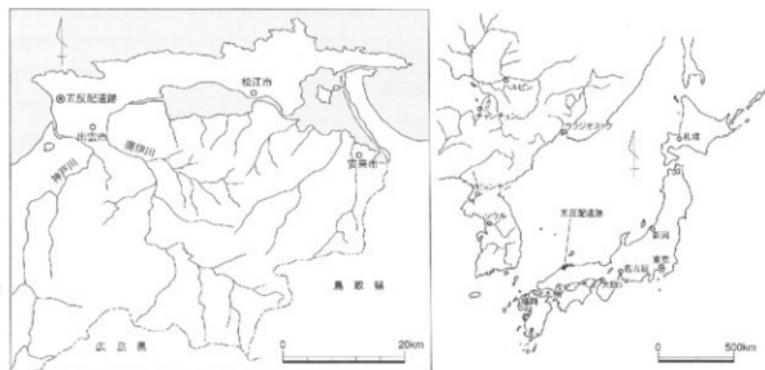
- 第20図 15Tの花粉ダイアグラム
 第21図 13Tの「プラント・オパールダイアグラム
 第22図 14Tの「プラント・オパールダイアグラム
 第23図 15Tの「プラント・オパールダイアグラム
 第24図 五反配遺跡周辺の花粉層序

表 目 次

- 第1表 古代出雲歴史博物館整備に向けた主要な経過
 第2表 土器観察表
 第3表 木製遺物観察表

写真図版目次

- 図版1 I区東壁土層：上 I区木製遺物出土状況（南から撮影）：下
 図版2 II区溝内木組（杭列）検出状況（南東から撮影）：上 II区同精査後（南東から撮影）：下
 図版3 II区溝、河道精査後（南東から撮影）：上 II区同精査後（拡大）（南東から撮影）：下
 図版4 II区溝内出土木製什器出土状況（東から撮影）：上
 III区河道内木製遺物出土状況（南西から撮影）：下
 図版5 III区河道内木製遺物出土状況（北から撮影）：上 III区精査・完掘後（南から撮影）：下
 図版6 I区・II区出土遺物（1）
 図版7 I区・II区出土遺物（2）
 図版8 II区出土遺物（1）
 図版9 II区出土遺物（2）
 図版10 II区・III区出土遺物
 図版11 五反配遺跡出土木製品の顕微鏡写真（1）
 図版12 五反配遺跡出土木製品の顕微鏡写真（2）



第1図 五反配遺跡の位置

第1章 調査に至る経緯と経過

五反配遺跡は出雲市大社町杵築東に所在する（第1図）。当遺跡の調査は島根県立古代出雲歴史博物館（以下歴博という）の建設工事に伴い、実施されたものである。歴博の整備に向けた主な経緯は以下のとおりである。

第1表 古代出雲歴史博物館整備に向けた主要な経過

S59. 7～S60	斐川町荒神谷遺跡で大量の青銅器出土（銅劍358本、銅矛16本、銅鐸6個）
H2. 1	「島根古代文化活用委員会」の提言 「島根の古代文化を調査研究・活用するために、拠点となる「古代文化研究センター」（仮称）」を設置
H4. 4	埋蔵文化財調査センター・古代文化センター設置
H6. 3	県長期計画に計上
H8. 2	県中期計画に計上（平成10年代頃を目指に整備）
H8. 10	加茂岩倉遺跡で大量の銅鐸出土（銅鐸39個）
H9. 5～12	古代出雲文化展の開催（東京・島根・大阪で巡回展示。入館者443,960人）
H11. 10	歴史民俗博物館・古代文化研究センター基本構想の提言（基本構想検討委員会） 「古代文化を中心とした島根県の歴史と文化を調査研究し、その成果を発信、活用していくための拠点施設として設置
H12. 2	県中期計画に計上（平成10年代後半を目指に整備）
H12. 4	出雲大社で巨大神殿の柱が出土 ○『金輪御造営巻』に見られる巨大な3本の柱（宇豆柱）を確認。10月には心御柱、側柱を確認
H12. 8	島根県立博物館が歴史系博物館としてリニューアルオープン
H13. 1	歴博・古代研立地場所発表 ○歴史民俗博物館：大社町　古代文化研究センター：松江市
H13. 12	歴博・古代研整備基本計画策定
H16. 2	歴博の名称「島根県立古代出雲歴史博物館」に決定
H16. 7	島根県立古代出雲歴史博物館調整池・下水道工事着手
H16. 8	島根県立古代出雲歴史博物館セキュリティーシステム候補者決定
H16. 10	島根県立古代出雲歴史博物館展示工事着手

今年度の調査に関する経緯は以下のとおりである。

平成15年10月に実施設計図が顧問合計画事務所から提示された。その結果、①平成14年度に五反配遺跡を発掘した時点で想定されていた本体建物建設予定部分のうちエントランス棟の位置が北側に変更され、また、②同じく平成14年度では決定されていなかった建設予定地東南角の調整池工事の図面も提示された。これら五反配遺跡に建設工事部分が及ぶと考えられる部分について、建設を計画した古代文化センターと文化財課が協議した結果、①については平成14年度発掘調査で旧エントランス部分では遺跡が確認されていないことから、掘削に当たって調査員による工事立会を実施するものとし、②につい

ては、工事が遺跡の深度に及ぶ調整池擁壁部分については、発掘調査を行うこととなった。

平成16年4月1日付けで、島根県古代文化センター長から島根県教育庁文化財課に文化財保護法第57条の2第1項に基づく関係文書が提出され、同15日付けで文化財課より古代文化センター長に調査の指示が通知された。発掘調査については、坪蔵文化財調査センターが実施することとなった。①については5月6日、7日に工事立会を実施したが、遺構・遺物は検出されなかった。②については、同年7月7日から表土及び造成土の重機掘削が行われ、7月12日から人力掘削による調査が開始され、8月30日に終了した。遺跡の取り扱いについては、事業の公共性を考慮し、記録保存はやむを得ないものとして、9月14日付けで坪蔵文化財調査センター所長から文化財課長あてに副中され、同日文化財課長から古代文化センター長にその旨が通知された。

五反配遺跡に関する既刊報告書

島根県教育委員会2004年『島根県飯川郡大社町 五反配遺跡 古代出雲歴史博物館建設予定地内坪蔵文化財発掘調査報告書』

第2章 五反配遺跡周辺の環境

第1節 地理的環境

五反配遺跡は、北に弥山、南東に仏経山を望む出雲市街北西方向約3kmの出雲平野北西部に所在に位置する。南を中国山地、北を島根半島に囲まれ、東を宍道湖、西を日本海に囲まれた出雲平野は、中国山地から北流してきた斐伊川・神戸川の沖積作用により形成された沖積平野である。約6~5000年前頃の縄文時代から徐々に沖積作用が開始されたと推定され、それ以前は日本海から現在の松江市辺りまでは古宍道湖が占めていたと考えられている。弥生時代頃には、沖積作用により古穴道湖が縮小され平野が形成されている。日本海に開けた入り海とともに広大な平野からの恩恵により、生活や生業を営むうえでは適地であったことが推測される。奈良時代に編纂された『出雲国風土記』によると、出雲平野西部には、周辺約18kmに及ぶ「神門水海」という潟湖が存在していたという。その後「神門水海」は後の両河川による沖積作用により縮小し、現在では、「神西湖」としてその姿を残している。出雲平野が現在のような景観になったのは江戸時代以降であり、遺跡が出現する箇所は出雲平野の形成と密接に関わっている。すなわち、これらの河川による沖積地帯の微高地に、その都度人々の生活が営まれてきたと言える。五反配遺跡は、北山山麓の小河川に由来する扇状地縁辺に位置し、人々の営みの痕跡が残された遺跡の一つである。

第2節 歴史的環境

旧石器・縄文時代

旧石器・縄文時代には、平野部への人々の進出は非常に少ない。最も早くは、縄文時代早期末の菱根遺跡（出雲市大社町）、上長浜貝塚（出雲市）が知られている。そのほとんどが平野縁辺部に位置しており、この頃の出雲平野は、古宍道湖湾が占めていたと考えられる。前期末～中期にかけては縄文海進にあたり、平野部のほとんどが海域となり遺跡は上ヶ谷遺跡（斐川町）で確認されているのみである。

海進後、海退が進み後期～晚期にかけて平野縁辺部の南西部の御陵田遺跡（出雲市湖陵町）、三部竹崎遺跡（出雲市湖陵町）、南部の三田谷I遺跡、南東部の後谷遺跡（斐川町）、北西部の菱根遺跡、原山遺跡、鬼ノ目遺跡、出雲大社境内遺跡、五反配遺跡、平野部に矢野遺跡、蔽小路西遺跡、浅柄遺跡、旧河道らしき跡の見つかった善行寺遺跡などの遺跡が確認されている。そのうち三田谷I遺跡では縄文時代後期前半の堰き止め湖が検出され、この湖沼からは同時期の縄文土器片及び丸舟が出土し注目されている。

弥生時代

弥生時代までは、中国山地から拡張してきた出雲平野は島根半島まで達していたと考えられる。出雲市大社町内各所でも、原山遺跡、鹿藏山遺跡、稻佐遺跡、南遺跡など、前期から後期の土器が出土している。このうち、原山遺跡では、数次にわたる発掘調査や表探によって前期から後期にかけての遺構・造物が検出されており、前期の配石墓や後期の貼石墓が複数確認されている。また、真名井（命主社境内）遺跡では寛文5（1665）年、神社の裏山の大石の下から4本の武器形青銅器と硬玉製の勾玉が出土している。このうち銅戈と勾玉が現在出雲大社に宝物として伝わっている。このほか日御碕地区のひろげ遺跡で、弥生時代後期から奈良時代に至る祭祀遺構が検出されている。

一方出雲平野中心部では、縄文時代から続く矢野遺跡、三田谷I遺跡、蕨小路西遺跡、浅柄遺跡などに加え、新たに出現する縁辺部の中野西遺跡、角田遺跡、古志本郷遺跡、田畠遺跡などがある。いずれも斐伊川、神戸川、神門水海により、形成された自然堤防の高高地に形成される。

中期になると斐伊川・神戸川の氾濫による流路の変化や沖積作用によって出雲平野は耕作を行う上で適地になったとみられ、遺跡数は飛躍的に増加する。中期～後期、沖積平野の3ヶ所の高高地に営まれた集落として、白枝荒神遺跡、大神遺跡、下古志遺跡、古志本郷遺跡、小山遺跡、矢野遺跡、田畠遺跡、知井宮多聞院遺跡などがある。中でも、白枝荒神遺跡、大神遺跡、下古志遺跡、古志本郷遺跡、小山遺跡、矢野遺跡の時期は、環濠集落の様相を見せている。また、斐伊川左岸標高40mの丘陵地で発見された長廻遺跡は、低地に多くの集落が営まれる時に、問題提起をする遺跡として存在している。後背湿地に立地する藤ヶ森南遺跡ではほぼ同時期の水田跡を検出している。この頃他地域との交流が盛んに行われていたとみられ、白枝荒神遺跡、矢野遺跡、下古志遺跡からは吉備系の土器が出土している。中期後半～後期の木製品が海上遺跡、姫原西遺跡で多く出土している。これらの遺跡の繁栄を背景に、平野南側の丘陵上にこの地の首長を葬ったと思われる四隅突出型埴丘墓の西谷3号墓はじめとする西谷埴丘群が出現する。西谷埴丘群では合計6基の四隅突出型埴丘墓が築造されており、西谷3号墓には大量の土器が供獻されていた。その中には古墳や北斎の土器も含まれていたため、これらの地域との交流も指摘されている。

近年、中野美保遺跡や出雲市平野北東部の青木遺跡からも方形貼石墓や四隅突出型埴丘墓が発見された。この地における首長の勢力分布に一考察を与えることと思われ、注目に値する。

古墳時代

古墳時代の集落は基本的に弥生時代の集落が踏襲され、継続していたと考えられる。しかし、出雲平野における弥生時代後期後葉～古墳時代前期の集落の様相は未だ不明な点が多く、現状では平野中央部の低湿地地帯において、人々の生活の様子を直接窺うことは困難である。その一方で、古志木郷遺跡や中野清水遺跡のように、古墳時代初頭の大量の土器が検出されている遺跡が存在する点は注意される現象である。前期末～中期の遺跡としては、井原遺跡や長廻遺跡、古志本郷遺跡、平野南側丘陵周辺の三田谷I遺跡、平野南西部の浅柄遺跡、そして平野中心部には、中野美保遺跡、中野西遺跡、中野清水遺跡が存在していた。三田谷I遺跡では、竪穴住居や方形周溝墓が検出されている。

出雲市大社町内では、出雲大社境内遺跡で前期の溝や比熱面が検出され、勾玉、臼玉、手握土器が出土している。また鹿藏山遺跡・稻佐遺跡・南原遺跡では弥生時代に統き、前期から後期の土器が出土し

ているが、中期以降は出土量が減少する。修理免本郷遺跡では前期以降から遺物が出土している。このころ、出雲市大社町南東部の湿地帯が開拓され、利用され始めた可能性を考えられる。遙拠地区の菱根西組で弥生時代終末から古墳時代前期の土器が出土し、亀谷遺跡でも中期の土器が出土している。また、可耕地の少ない日御碕地区でも日御碕神社境内遺跡やおわし遺跡、黒田遺跡で古墳時代後期の土器が出土している。

前期古墳としては、西谷墳墓群の同一丘陵上に古墳時代初頭に属する西谷7号墳（方墳）を始め、出雲地方では最古の前方後円墳となる可能性が考えられている平野北東部の丘陵状に築かれた大寺古墳、平野西側の神西湖東岸に築かれ、筒形銅器を出土した山地古墳（円墳）などが挙げられるのみである。中期の古墳としては、池田古墳、西谷15号墳、同16号墳、北光寺古墳（前方後円墳）、浅柄II遺跡検出の古墳などが知られているものの、その検討が行えるほどの調査所見の蓄積はない。

後期後半になると出雲西部地域を領域とするような大規模な首長墳群が形成される。神戸川東側に出雲地方最大の前方後円墳今市大念寺古墳を始め、上塩治染山古墳、地藏山古墳などの首長墳が連続して築造される（今市・塩治古墳群）。一方、神戸川西岸の丘陵上に妙蓮寺山古墳、放れ山古墳、小坂古墳などの中小規模の古墳が、前者の古墳群を補佐するかのように次々と築造される（吉志古墳群）。出雲市大社町内でも高間ヶ原古墳が知られている。終末期になると、全国最大規模と言われている上塩治横穴墓群（約180穴）・神門横穴墓群（約100穴）に代表される横穴墓が多数営まれる。しかし、最近の調査では、上塩治横穴墓群の周辺で三田谷2号墳・3号墳、光明寺4号墳、大井谷古墳、狐馳谷古墳といった後期から終末期にかけての古墳が次々と確認されている。

後期の集落遺跡としては、中野美保遺跡、中野清水遺跡、三田谷I遺跡が知られているが、前二者では建物址などの遺構が顕著に検出されておらず、未だ大きな発見はない。しかし、こうした大型古墳や横穴墓が飛躍的に増えたことから、その支持基盤になった人々の生活域が出雲平野にあり、人口が増加していたことが推測される。

奈良・平安時代

律令期の出雲平野は、天平5（733）年に作成された『出雲國風土記』に記載されているように、鳥神山より西流して神門水海に入る「出雲大川」（斐伊川）と琴引山より流れ神門水海に入る神戸川に挟まれた肥沃な土地に恵まれた。

出雲市大社町内の鹿嶽山遺跡では奈良時代の井戸や貝塚が調査され、土器・須恵器のほか奈良三彩や150点もの墨書き土器が出土している。また、奈良時代の貝塚が中分貝塚でも確認され、鉄製のヤスが出土している。

8世紀の律令国家の完成に伴い、国・郡制が敷かれ出雲平野は出雲神門郡と出雲郡の一部に編成され、それに伴い郡の官庁である都衙（郡家）が設置された。官衙跡と推定される大形の掘立柱建物跡や墨書き土器、円面鏡などが検出され、神門郡家との関連が注目されている古志本郷遺跡、墨書き土器、綠釉陶器、大型掘立柱建物跡などを検出した天神遺跡、出雲郡家との関連が推定されている後谷遺跡、大量の墨書き土器、木簡などを検出した吉木遺跡などがある。近年の調査で墳丘を有する光明寺3号墳から石櫃が発見され、小坂古墳や朝山古墳とともに、出雲平野の火葬墓導入期の解明に進展をみせつつある。また、『出雲國風土記』には神門郡に二所（朝山郷新造院・古志郷新造院）、出雲郡に一所（河内郷新造院）が建立されたことが記載されており、天寺平魔寺（斐川町）は河内郷新造院、神門寺境内魔寺は朝山郷

新造院に、矢野遺跡は八野郷に比定されている。

中・近世

出雲大社境内遺跡で、宝治2（1248）年に建てられた本殿の柱と考えられる3本一組の巨大な柱や、中・近世の本殿・柵列が確認されている。原山遺跡では平安時代末から鎌倉時代初めの土師器や白磁碗が出土している。哲願時古墓では室町時代の土師器・陶器と共に羽口・鉄滓・鉄器が出土しており、遺構は確認されていないが、小鐵治が行われていた可能性が考えられている。鹿嶋山経塚では土師器皿や古銭が出土し、土師器の多くに梵字が墨書きされていた。奉納山経塚では金銅板製経筒17口分・銀装銅板製経筒1口分と古銭65枚、土師器が出土している。

出雲平野中部以南では、矢野遺跡から14～15世紀の層歴跡が発見されている。また、藏小路西遺跡から周囲を溝で囲まれた約1haの規模を有する12世紀後半～15世紀の官跡が発見された。隣接して三木氏館跡が存在しており、「中世朝山家惣領家」の居館である可能性が指摘されている。その他、藏小路西遺跡、渡橋沖遺跡、下古志遺跡などで館跡が検出され、当時の状況が明らかとなりつつある。

また平野部から谷奥深い大井谷Ⅱ遺跡では、寺院関連の遺跡ではないかと考えられる遺構・遺物が検出されている。山間部では、北山山麓で鳩ヶ巣城、南部丘陵地帯で人廻城（向山城）、大井谷城、半分城などが築城されている。その他、生産遺構としては五反配遺跡、高岡遺跡、中野美保遺跡、中野清水遺跡で中世以降の水田遺構が検出されている。

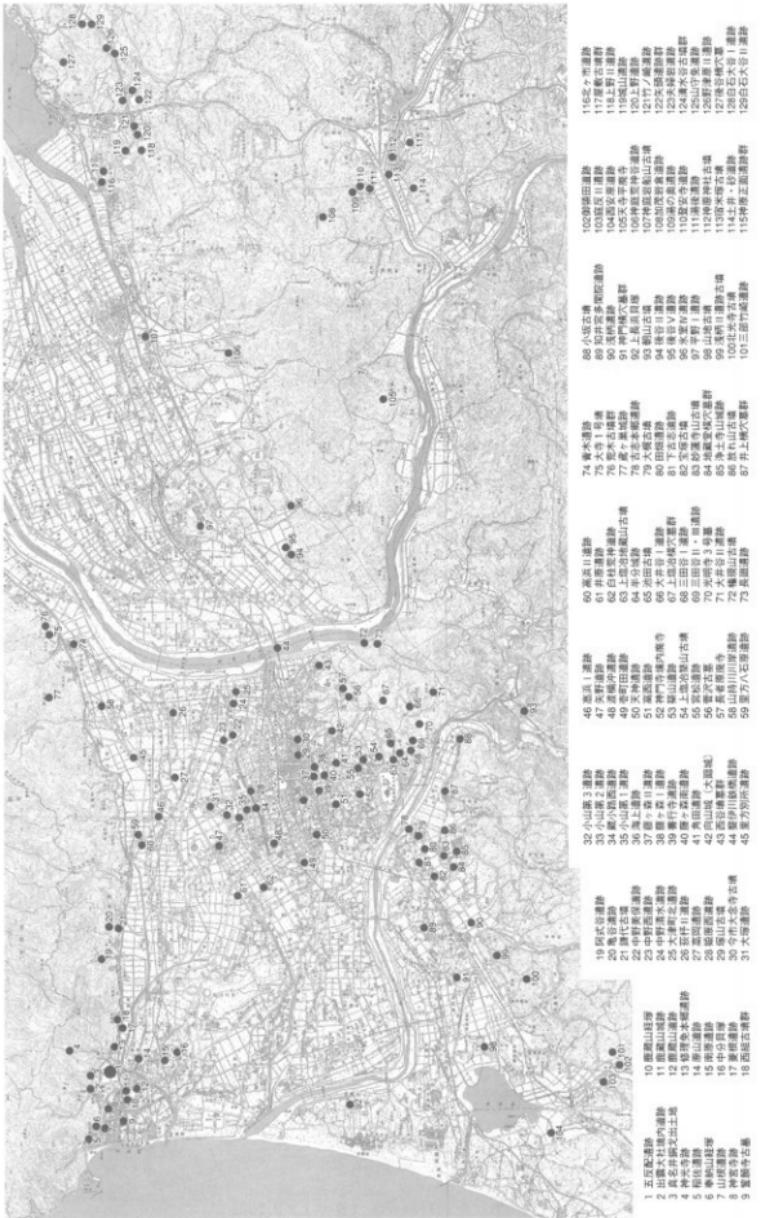
（参考文献）

- 出雲市教育委員会1997『白枝系神道跡』1997[出雲市教育委員会]
出雲市教育委員会2000『光明寺3号臺・4号墳』
出雲市教育委員会2000『浅野遺跡 西出雲駅南上地区整備事業に伴う埋蔵文化財発掘報告書』
出雲市教育委員会2001『大井谷Ⅰ・Ⅱ遺跡～斐伊川放水路建設予定地内発掘調査報告書Ⅲ～』
出雲市教育委員会2001『天神遺跡第11次発掘調査（社）中國建設弘清会事務所所長殿に伴う発掘調査報告書』
出雲市教育委員会2001『出雲市埋蔵文化財調査報告書第11集』出雲市教育委員会
出雲市教育委員会2002『白枝系神道跡 月原遺跡 白枝地区ふるさと創造施設事業に伴う発掘調査報告書』
出雲市教育委員会2002『中野西遺跡 出雲市北部第2土地区整理事業に伴う発掘調査報告書』
出雲市教育委員会2002『天神遺跡（第10次発掘調査）市道山脇本線北延線設置予定地内埋蔵文化財調査報告書』
出雲市教育委員会2002『天神遺跡（第12次発掘調査）都市計画道路山陰本線南沿新設設置予定地内埋蔵文化財調査報告書』
出雲市教育委員会2002『古志木郡遺跡・下古志遺跡 平成14年度古志道跡町範囲認調査報告書』
出雲市教育委員会2002『下古志遺跡一考察編』出雲市埋蔵文化財発掘調査報告書第12集
出雲市教育委員会2002『小山遺跡第3地点第3次発掘調査報告書平成12年度市道40号外1線道路改良工事に伴う』
島根県古代文化センター1999『上坂遺跡山古墳の研究』
島根県教育委員会1999『斐原西遺跡 一般国道4号出雲バイパス建設予定地内埋蔵文化財調査報告書1』
島根県教育委員会2002『古志本郡遺跡IV・放れ山横穴墓群・只谷回軒・上沢Ⅲ遺跡（分析編）斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書14』
島根県教育委員会2004『鳥取県飯石川郡大社町 五反配遺跡 古代出雲歴史博物館建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』

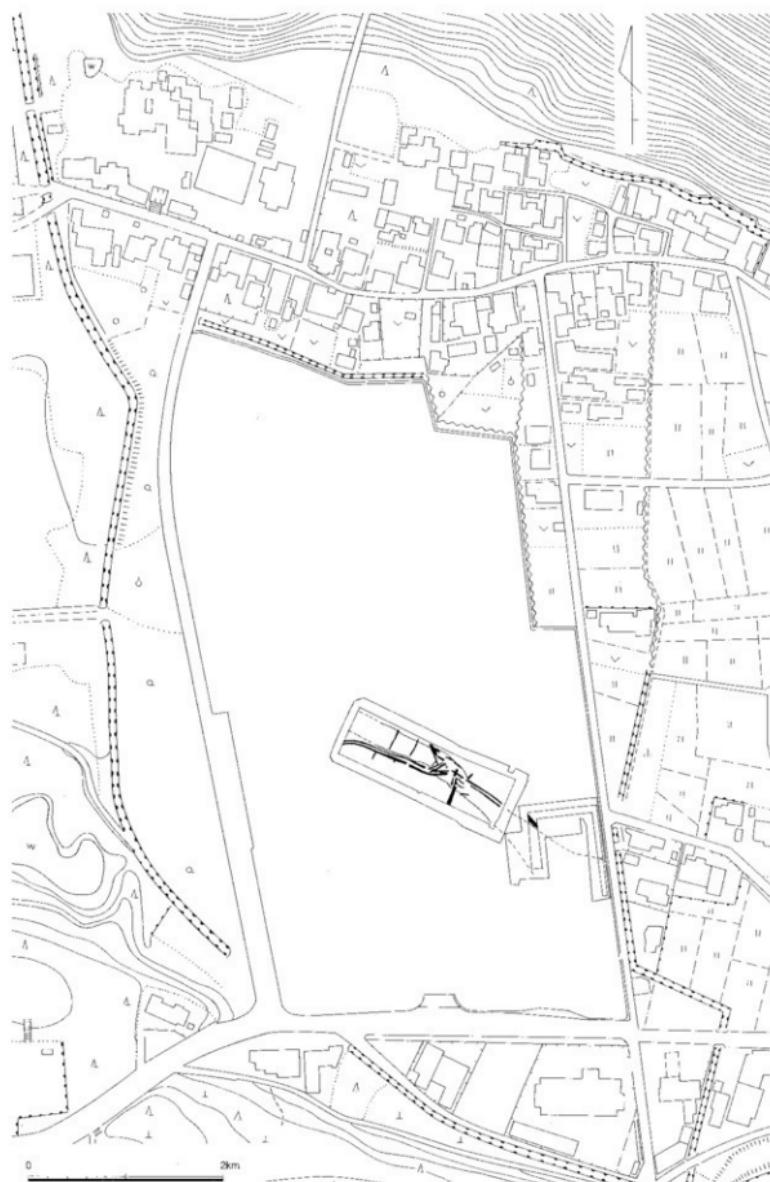
第3章 調査の方法と概要

第1節 調査区の設定と調査方法

島根県立古代出雲歴史博物館建設予定地内における今年度の調査範囲には、平成13年度の調査区と同



第2図 出雲平野周辺の主な遺跡（S=1／100,000）



第3図 五反配遺跡調査区 ($S = 1/2,500$)

じく、厚さ1.5m程度の盛土がなされている。また、その下には近現代以降の耕土が存在している。今回の調査でも平成13年に亘って、現地表面から現代の耕土の標高約2mまでは重機による掘削を行い、それ以下を人力掘削によって調査を行う方針を採った。

調査区は駐車場擁壁設置に伴う範囲が対象であるため、コの字状の変則的なものとなった。調査区は便宜的に3つに分割し（Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ）、順次調査を行った。

第2節 調査成果

1. 基本層序（第6図・第7図）

基本的に5つの堆積に分類できる。全調査区で共通する基本層序は1～5層である。以下、その概要を上層から順次記す。

1層は近世以降の水田面を覆っている淡青灰色粘土層である。2層は1層の下層に広がる茶褐色粘質土層（水田）と暗茶褐色粘質土層（水田）である。3層は水田に由来する2層の下層に広がる古代～中世の包含層（黒灰色粘質土）である。3層からは須恵器片や銅鈴が検出されている。4層は河道と溝内の堆積土である。これらの埋土は暗黒茶褐色粘質土層（腐蝕物含む）と淡青灰色粘土のブロックが含まれたものである。4層からは、木製遺物が出土している。また弥生土器片が5層との境界近くで出土している。5層は河道や溝の下層に広がる。腐蝕物を含む粘質土層で、さらにその下層には腐蝕物や遺物を含まない灰色系の粘土層が堆積している。なお、3層の下層には本来、腐蝕物を含む暗黒茶褐色粘土とその下層に青灰色粘土が堆積しているが、4層の溝と河道に切られている状況である。調査はこの二つの層の上面で、河道と溝の埋土（4層）を完掘し、一部は5層にある粘土層まで遺構と遺物の確認を行った。

2. 古代以降

今回の調査では奈良・平安時代以降の遺構は検出されなかった。遺物はⅡ区から古墳時代終末期の須恵器片1点と古代の銅鈴1点を3層から検出している。

4. 弥生時代～古墳時代

遺構としては、溝と河道が検出されている。河道からは、自然木や加工痕跡のある木製品の残片が出土している。一方、溝では矢板列・梳列を含めた木組が検出されている。これらの木製遺物は建築部材等が再利用されたものが含まれている。また、自然木や建築部材、日常生活用具の一部あるいは再加工されたものと考えられる残片が検出されている。この木組遺構は、溝内部の両岸に並行して造られていてことから、溝の護岸としても機能していた可能性が考えられる。

また、河道底部と5層の境界付近からは、弥生時代前期後葉～中期前葉の土器片が検出されている。このことから河道は弥生時代前期後葉以降を上限とするものと考えられる。また河道からは平成14年度の調査と同じく古墳時代以降の遺物は検出されず、河道は溝に先行して存在していたものと考えられる。なお、溝との切り合い関係は確認できなかったものの、Ⅲ区の河道内にも矢板列や複数の木製品が出土していることから、河道は溝に先行して存在し、Ⅲ区付近では溝が河道に合流していた可能性が考えられる。Ⅲ区の調査所見では河道が埋まった後に溝が切っているか否かの判断はできなかった。溝の時期は上器資料等が出土しなかったため不明である。平成14年度の調査では弥生時代中期～古墳時代後期までの土器資料が出土しており、今年度検出された遺構の連続性が確認されたことから、今年度検出された溝も弥生時代中期を上限とする古墳時代後期までの遺構と考えられる。

第4章 検出した遺構と遺物

第1節 調査I区(第8図)

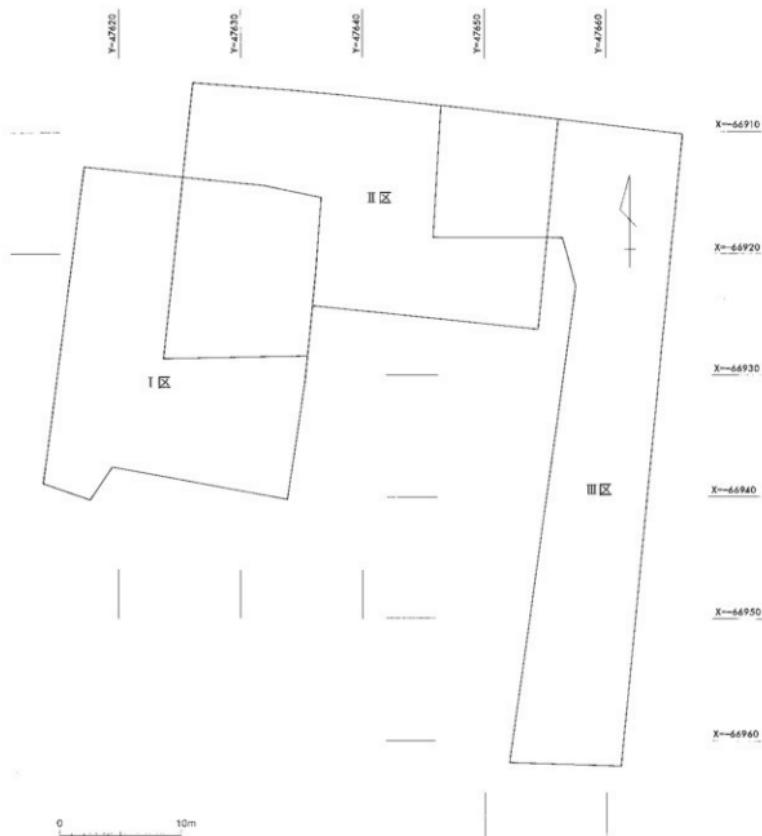
河道

ここでは河道と溝が検出された。この河道北側の肩と溝北側の肩は上層断面で確認された。平成13年度の調査区から南東方向に続く一連のものである。河道の埋土からは多数の自然木や、加工痕跡のある木製品の一部が検出されている。

I区出土土器(第13図)

第4層からは須恵器壺が1点出土している。一方、河道の底部付近(4層と5層の境界付近)からは、約21点の弥生土器片が検出された。接合関係にあるものを含めて4個体を図化し得た。

図13-3は、弥生時代前期後業(I-3~4様式)の壺である。口縁部には刻みが施されている。4



第4図 五反配遺跡調査区配置図 ($S = 1/400$)

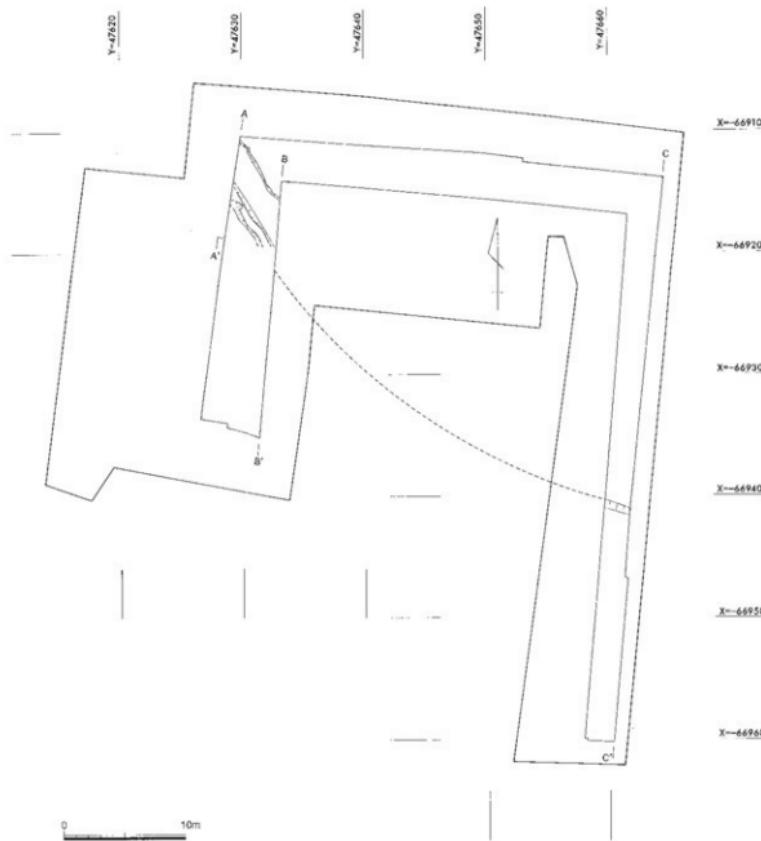
は壺の肩～胴部で、肩部に断面M字状の突帯が巡る。北部九州の影響が窺え、弥生時代中期（Ⅲ様式）と考えられる。5は口縁部に凹線が施され、頸部に貼り付け突帯が巡る壺である。弥生時代中期後葉（Ⅲ-2～Ⅳ-1）と考えられる。6は壺の底部で、内面には炭化物が付着している。外面底部付近では、ミガキを施した後に横ナデの処理をしている。弥生時代中期（Ⅲ様式）と考えられる。7は須恵器の蓋である。小型化していることから、古墳時代終末期のものと考えられる。

I区出土木製遺物（第13図）

1は建築部材の可能性が考えられる。2は剣を模倣した武器形の木製遺物である。

I区出土金属器（第13図-8）

第4層からは、銅製の鉛が1点検出された。胴部中央の横断面形態はやや楕円形である。中央部の突帯を含めた短径は3.6cm、長径は3.8cmである。紐の内径5mmである。重量は16.13g、総じて赤銅色で、内部に鳴子等は検出されなかった。



第5図 五反配遺跡遺構配置図 ($S = 1/400$)

第2節 調査Ⅱ区（第9図）

河道

ここで検出された河道も調査Ⅰ区のものと同一のものであるが、その北側の肩が検出されている。この結果から、河道は南東方向に向かって延びていることが判明した。また、調査Ⅲ区にもこの河道の北側の肩が検出されていることから裏付けることができた。

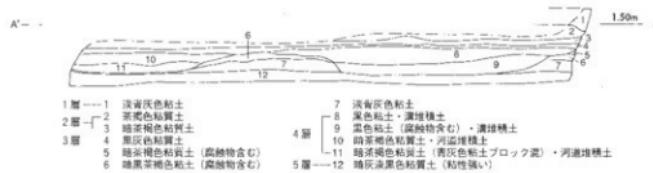
溝

溝は河道の北側の肩付近で、南東方向にはほぼ並列して検出された。溝の中には杭列が2列と矢板列が1列、それぞれ南東方向に並列して並んでいるのが確認された。

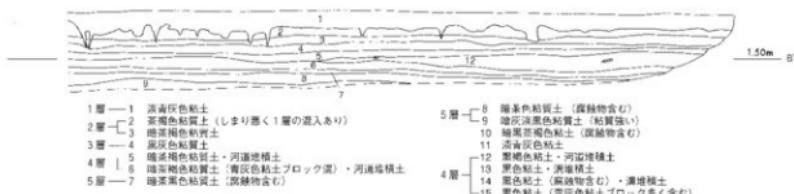
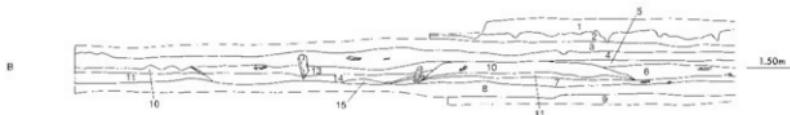
杭列・矢板列・木組（第9図・第10図）

また、これらの板列や矢板列の間には自然木や建築部材と考えられる木製品の一部などが、ほぼ直交して検出されている。

平成14年度の調査では、この杭列と矢板列、及びそれらに伴う木組が溝の両岸の護岸として機能している状況で検出されている。今年度の調査範囲からは溝の両岸に由来するような明確な検出ではなかった



調査Ⅱ区西壁土層図（1/80）



調査Ⅱ区東壁土層図（1/80）

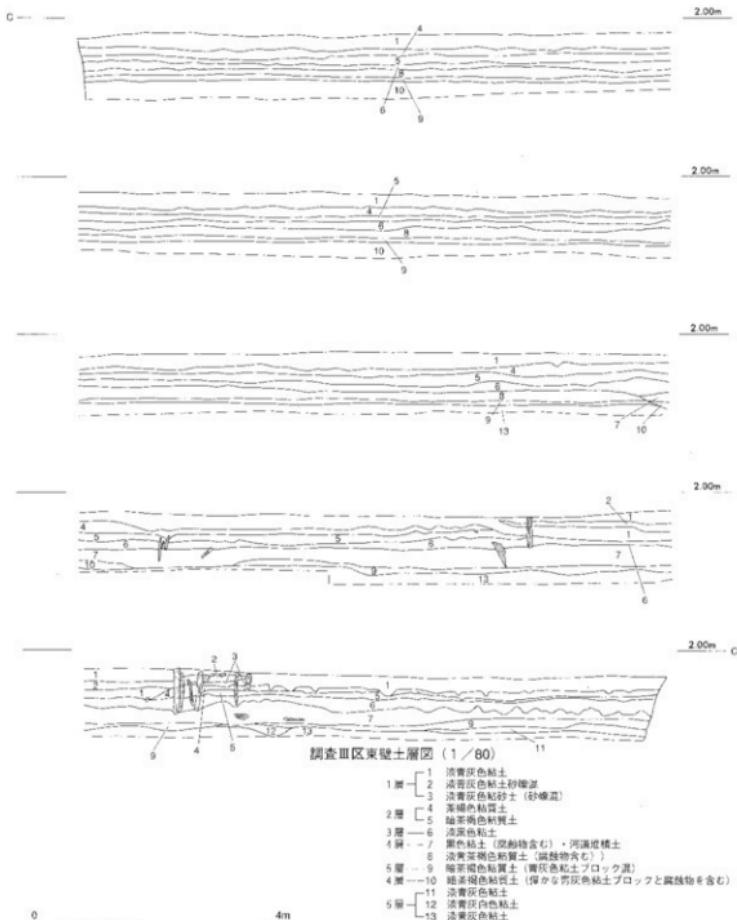


第6図 五反配遺跡基本土層図（1）（S = 1/80）

ものの、木組等の存在を考慮すれば、これらの杭列・矢板列が溝に伴って護岸としての役目を果たしていたものと考えられる。

II区出土木製遺物（第14図・第15図・第16図）

木製遺物は状態の良好なものを優先して取り上げ、以下10点を図化した。第15図-1～7は溝内部の南側で検出された矢板列である。建築部材等を再利用しているものと考えられる。いずれも側面を斜めに加工しており、先端部の断面形態は扁平な平行四辺形である。1～4は先端を尖らしているが、5・6は先端部が直線状に加工されている。7は3の矢板の根本で検出されたものである。3が突き刺さっ



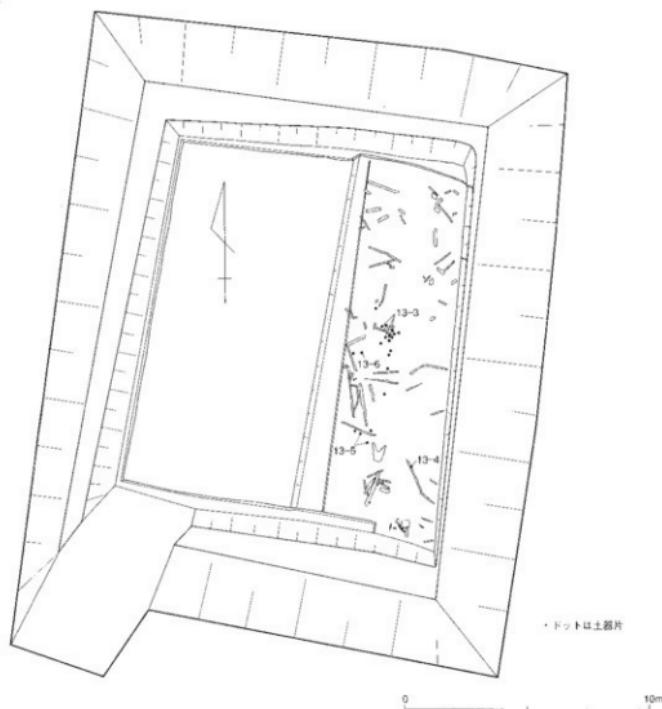
第7図 五反配跡基本土層図 (2) ($S = 1/80$)

ている状況であった。8は溝の堆積土から検出されたもので、両側に切り込みが見られる。9～11はいずれも木組造構に伴うものと考えられる。いずれも建築部材の一部と考えられ、他の部材と組み合わせるための溝や切り込み等が施されている。

第14図-1は木製の高杯である。杯部の約6割程度が残存している。復元すると直径約24.5cm程度のものである。外面に4分割する割付線が入れられ、中心から約8cmの外周にも円形の割付線が巡っている。また直径1mm程度の穿孔が9箇所に空けられているが、特に規則性は見られない。同-2は建築部材の一部と考えられる。中心部に台形の切り込みが見られる。同-3は容器等の底板に相当するものと考えられる。

同-4は調度品類の一部と考えられる。他の部材を接合するための切り込みと目釘がそれぞれ2箇所で確認できる。上部と考えられる面は湾曲している。

第16図-1・6・7は木組造構に伴うものである。1は穿孔されている箇所があり、そこに他の部材の一部が刺さっている状態で検出されている。6は木材を半截し、一方を加工して尖らしたものである。7は断面形態が8角形に加工された柱状の部材である。2～5は溝内部の北側で検出された杭列である。それぞれ自然木を杭として加工している。先端部を尖らせて加工している。



第3節 調査Ⅲ区（第12図）

河道（第12図）

調査3区の河道は、1区・2区で検出された河道の延長上（南東方向）に相当する箇所で検出された。河道の北側の肩が検出され、河道内の埋土からは多数の自然木や木製品の一部が検出されている。また、切り合ひ関係は判然としないものの、2区で検出された溝がこの河道に重なっている。これは2区の矢板列の続きと想定されるものが、3区の河道内で検出されていることからも推定される。

全調査区を通して河道の南側の肩は検出されなかったものの、河道は概ね南東方向に向けて続いていることが確認された。

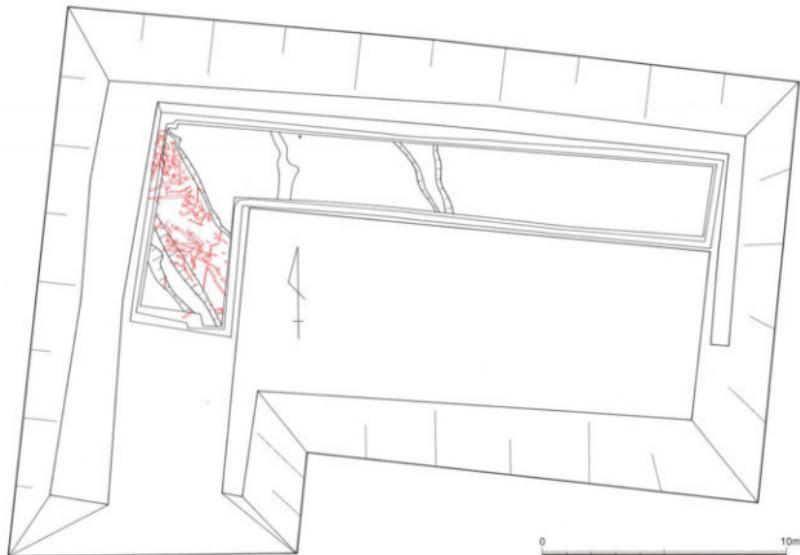
Ⅲ区出土木製遺物（第17図）

2区と同じく、遺存状態の良好な木製遺物も優先して取り上げ、以下に4点図化し得た。1は田下駄の再利用品である。中央部に穿孔が空けられている。2・4は建築部材の一部と考えられる。2は他の部材と組み合わせて利用されたものと考えられる。また比熱痕が見られ、大半が炭化している。4は穿孔が2箇所で確認されている。3は桶のような容器の一部である。底板を固定するための段が施されている。

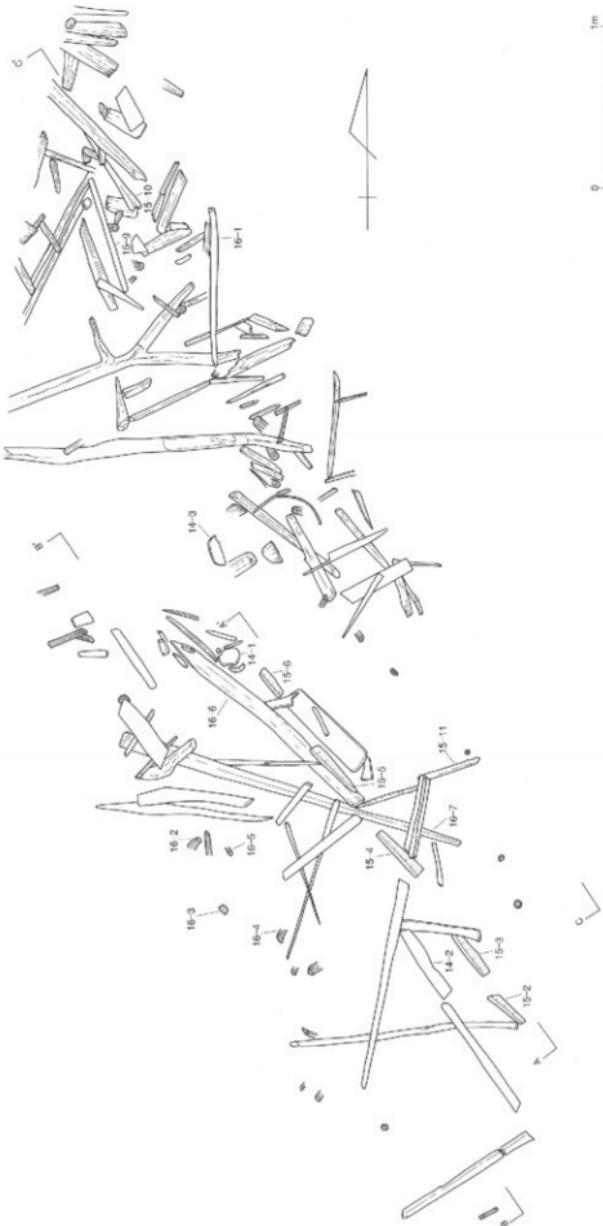
第4節 小結

今年度の五反配遺跡の調査は、平成14年度に発掘調査の行われた調査区から、南東に約10m離れた400m²の範囲が対象である。遺構としては平成14年度調査で検出された河道、溝、杭列・矢板列が検出されるに至った。これらは平成14年度調査で検出された一連の遺構であり、本調査区間との対応関係が確認された。

河道は調査区の北西部と南東部で確認された。この河道は南東方向に流れる吉野川の旧河道と考えら



第9図 調査Ⅱ区遺構・遺物検出状況 ($S = 1/200$)

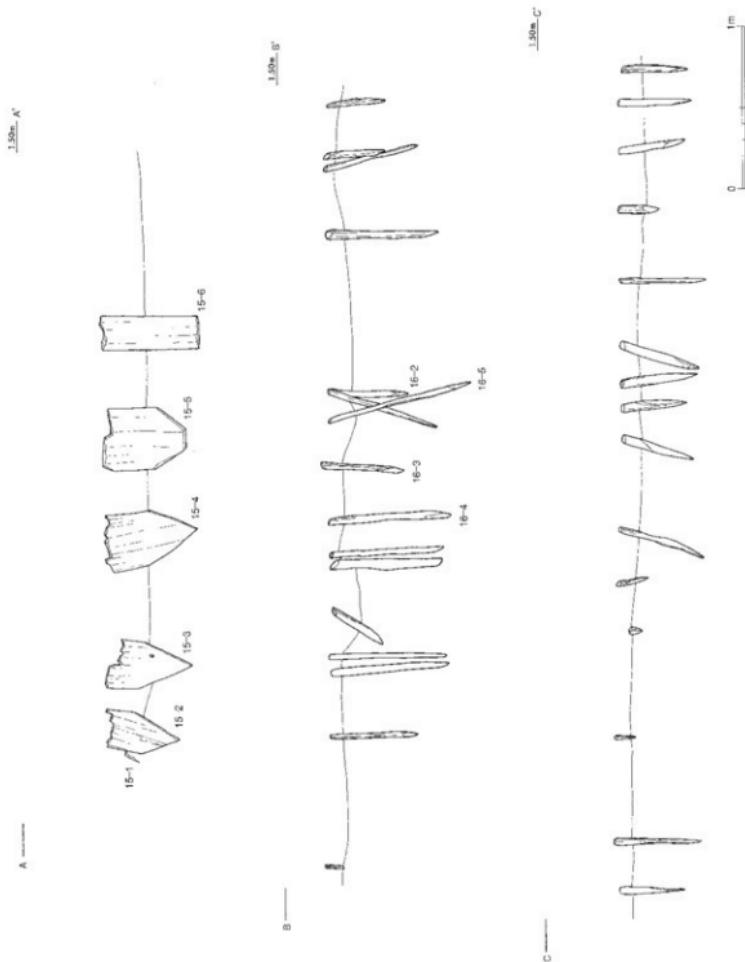


第10図 調査II区遺物出土状況 ($S = 1 / 30$)

れる。河道に伴う堆積上からは、底部付近で弥生時代中期の土器を検出している。また、上層では木製遺物を若干検出している。

溝の方向も同じく河道とほぼ並行する。ただし、調査Ⅲ区で河道に切り合っており、調査Ⅲ区の東南部でも溝の南側の肩が検出できなかった。調査Ⅲ区南東部付近では河道と併存して機能していた可能性が考えられる。出土遺物に土器は無かったが、多數の自然木や若干の木製遺物（転用材を含む）が検出された。その他、矢板列や杭列が見つかっている。

矢板列・杭列は溝の中で検出され、溝に沿って並んでいた。矢板列は1列、杭列は2列検出されてい



第11図 調査Ⅱ区矢板・杭列立面図 ($S = 1/30$)

る。大半の木製遺物はこれらの矢板列・杭列の間から検出され、これらの列を補強する木組のような役割を果たしていた可能性が考えられる。検出範囲が限られているため、矢板列・杭列や木組の用途は不明であるが、広範囲に木組が検出された平成14年度調査の成果から、水田機能を維持・管理するための畦畔や水路として機能していたものと考えられる。また、溝との関係から護岸としての機能性も考えられる。なお、溝の詳細時期は不明であるが、平成14年度調査では、弥生時代中期～古墳時代後期の土器が溝から検出されていることから、これと同一の時期と考えられる。

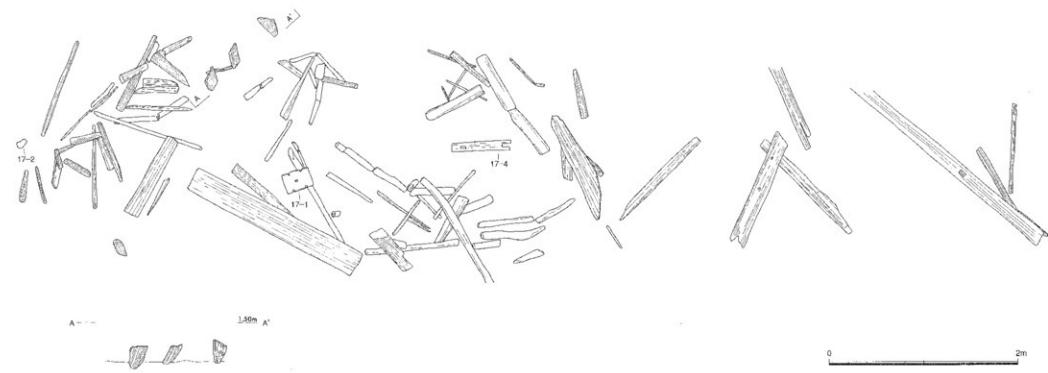
また、木製遺物もいくつか検出された。このうち、木製遺物は建築部材の転用品、調度品や什器と考えられる破損品、あるいは転用材が木組に利用されている。当時の生活用具を復元する上でも重要な発見である。また、古代に伴う遺物も若干検出されており、この地が長く人々の生活の中で深く関わっていたことが改めて確認できた。

第2表 土器観察表

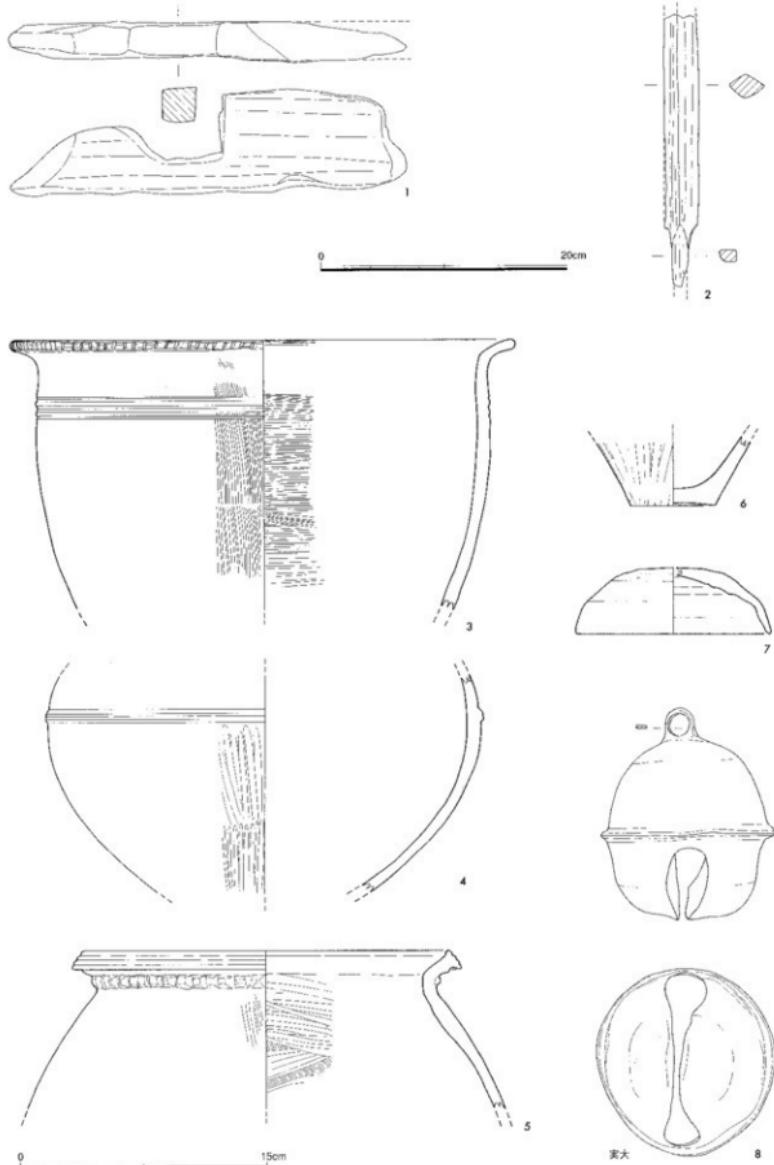
施設名	位置	地区	層位	附土	表面	四種	遺存状	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	鉢形	内面の質感	外縁の質感	形態・文様の 特徴	焼成	粘土	油汚
13-3	7	TIX	4層	河溝	赤生土層	裏	10%	39.7	16.5	27.4	浅灰茶色	ハケ、ナデ	ハケ、ナデ	口縁部に斜状剥落、鉢 底に3箇所の波 紋	良好	3mm程度の白 色砂礫を多く 含む	-
13-4	7	TIX	4層	河溝	赤生土層	底(剥離)	10%	-	13.5	26.4	深青 茶褐色	ナデ	スカラ、 ナデ	脚部に所定M 字の焼出が ある	良好	密	北風丸用 系
13-5	7	I区	4層	河道	赤生土層	裏	10%	23.5	9.7	-	29	淡灰茶色	ハケ	口縁部剥 離、底部に滑走痕 等	良好	白色砂粒、金 屬は不含む	-
13-6	7	I区	4層	河溝	赤生土層	底(剥離)	10%	-	4	5	褐色	ナデ	スカラ、 ナデ	脚部に所定M 字の焼出が ある	やや不良	0.5mm以下 の白色砂粒を含む	-
13-7	7	I区	3層	包含層	漆器	裏	40%	11.7	4.1	-	淡青灰	凹輪ナデ	凹輪ナデ、 ナデ	口縁部ナデ、 ナデ	良好	0.1mm以下 の白色砂粒を含む	-

第3表 木製遺物観察表

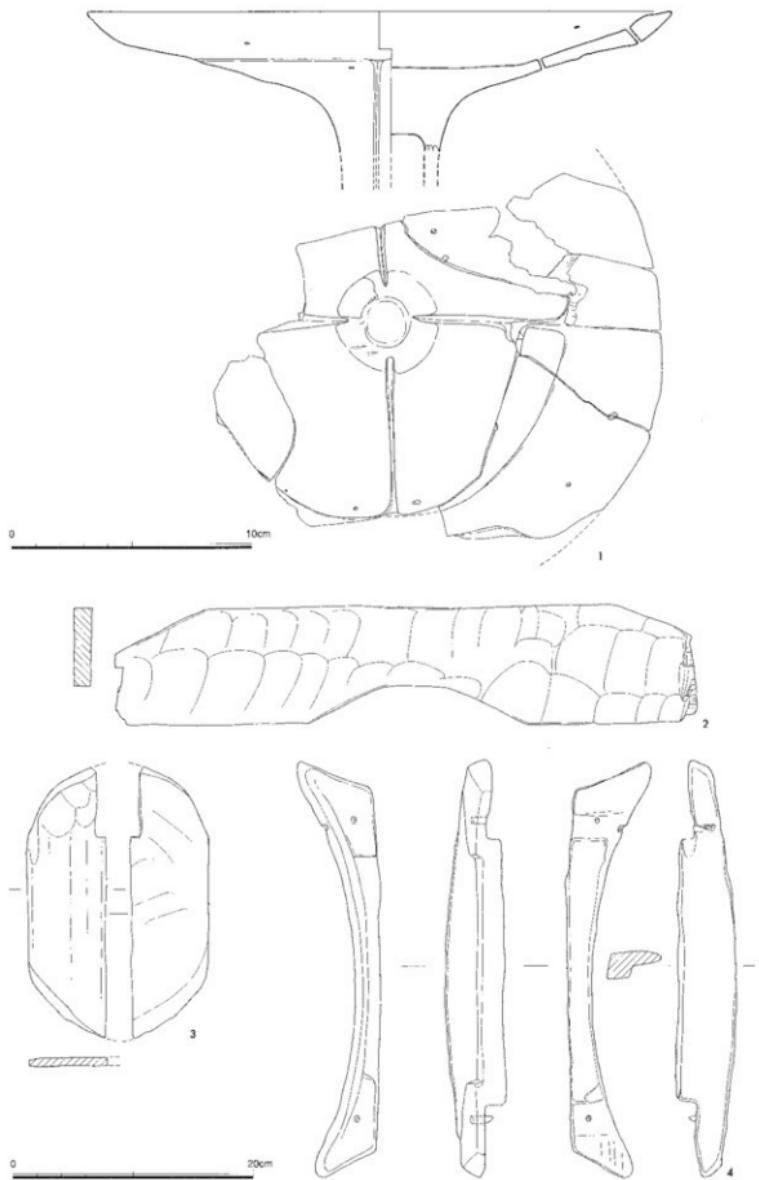
施設 番号	木製 遺物	塗刷	品目	出土地點	層位	寸法(cm)			備考
						長	幅	厚	
13-4	6	漆器部材	無	I区	4層	32	8.4	3.4	方孔に斜めにカットし、刺し込みが入れる。一部炭化している。
13-2	6	武器形代	剣	I区	4層	22.3	2.8	1.9	圓弧は複数である。劍は明瞭である。
13-1	6	漆器	萬子	II区	4層	直径(20) 残高(5.7)	-	-	II区に等分する波状線がある。内外曲丸に、黒色に剥落されている。
14-2	6	漆器部材	萬子	II区	4層	48.3	9.7	1.4	中央部に食入跡があり。
14-3	6	漆器	絲(底板)	II区	4層	22.2	6.3	0.65	スカラ、底 板付近にさくら ガキ透ナデ
14-4	6	漆器	圓弧	II区	4層	34	6.2	2.1	円弧の連串している。
15-1	8	漆器部材	欠板	II区	4層	41.8	8.5	1.25	方孔の孔が見られる。
15-2	8	漆器部材	欠板	II区	4層	48.6	27	2	方孔の孔が見られる。
15-3	8	漆器部材	欠板	II区	4層	56	31.3	1.8	方孔の孔が見られる。
15-4	8	漆器部材	欠板	II区	4層	47.6	38.4	1	先端が斜めに削り取れが可視である。
15-5	8	漆器部材	欠板	II区	4層	32.4	38	2.1	尖端部が失らず、台形をなす。
15-6	7	漆器部材	欠板	II区	4層	60	20	1.5	尖端部が直線的に加工されている。
15-7	8	漆器部材	欠板	II区	4層	43.4	8.5	2.5	尖端部が直線的に加工されている。
15-8	7	漆器部材	欠板	II区	4層	33.5	32.5	1.2	尖端部が直線的に加工されている。ほぼ台形の刺し込みが左右に施されている。
15-9	8	漆器部材	漆木	II区	4層	75.8	4.4	3	片刃の刃辺に刺し込みが見られる。
15-10	8	漆器部材	漆木	II区	4層	73.8	4	2.5	尖端部が斜めに削り取られ、他の尖端部に押入されていたものと思われる。
15-11	8	漆器部材	漆木	II区	4層	42	5	2.3	片刃の刃辺に刺し込みが見られる。
16-1	9	漆器部材	漆木	II区	4層	74	4.8	3	方形の小口の横に楔形の握り跡が押入されている。本体自体にも段が通され、前の木材と接合する内側面が露出している。
16-2	9	漆器部材	桃(丸)	II区	4層	50.6	4.8	1.5	加工が少ない。(頭が残る)
16-3	9	漆器部材	桃(丸)	II区	4層	62.5	4	3.5	加工が少ない。(頭が残る)
16-4	9	漆器部材	桃(丸)	II区	4層	76	7	7	加工が少ない。(頭が残る)
16-5	9	漆器部材	桃(丸)	II区	4層	91	2.6	2.8	加工が少ない。(頭が残る)
16-6	9-10	漆器部材	桃	II区	4層	149	8	4	片側が削り取られたり、もう片方は曲取りがなされている。
16-7	9-10	漆器部材	柱	II区	4層	238	7	6	八角形の西取りがなされている。
17-1	10	漆器	木下駄	III区	4層	29.2	20.3	1.4	中央部に方孔が開いており、円筒形に削り込みが施されている。
17-2	10	漆器部材	漆木	III区	4層	11.5	6.6	1.5	他の部材と接合するためと考えられる段差の加工が施されている。一頭が炭化している。
17-3	10	漆器	桶	III区	4層	30.5	14.5±1	3.6	底部を糊封するための液が濁けている。
17-4	10	漆器部材	漆木	III区	4層	64	8.5	2.3	方孔の孔が二重開けられている。



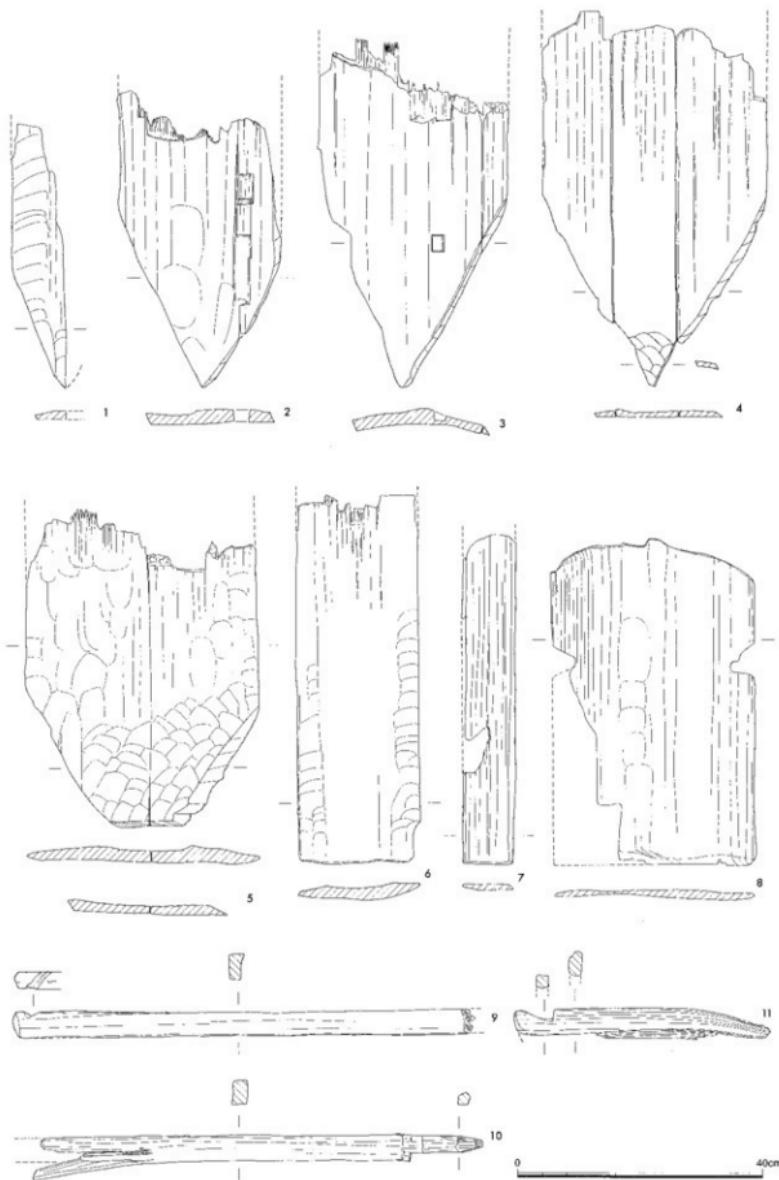
第12図 調査Ⅲ区遺構・遺物検出状況 ($S = 1/200 \cdot S = 1/40$)



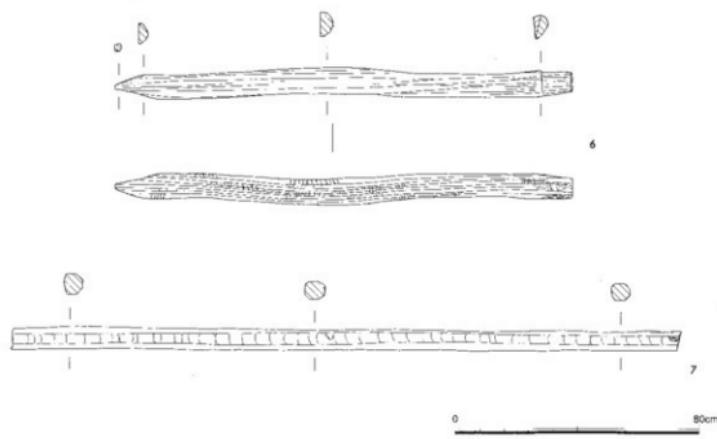
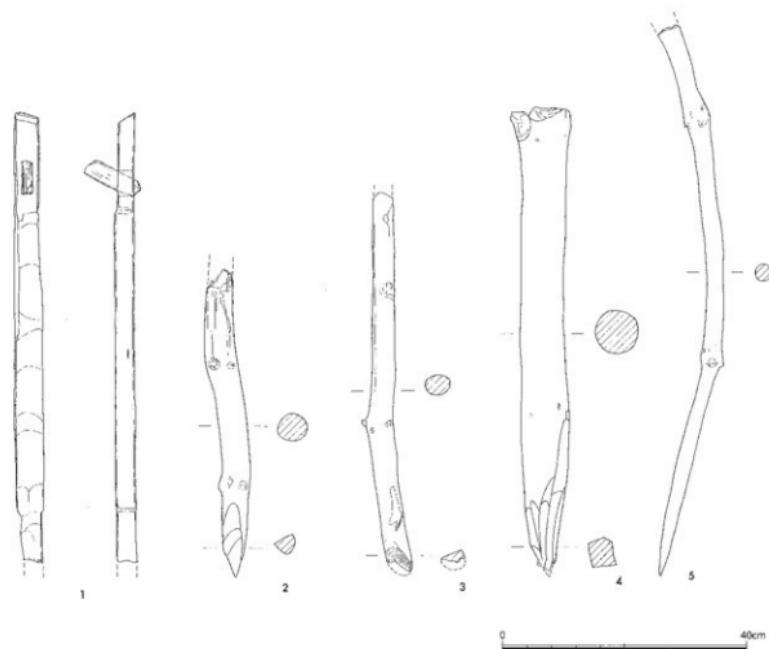
第13図 調査I区出土遺物 (1・2はS=1/4、3~7はS=1/3、8は実物大)



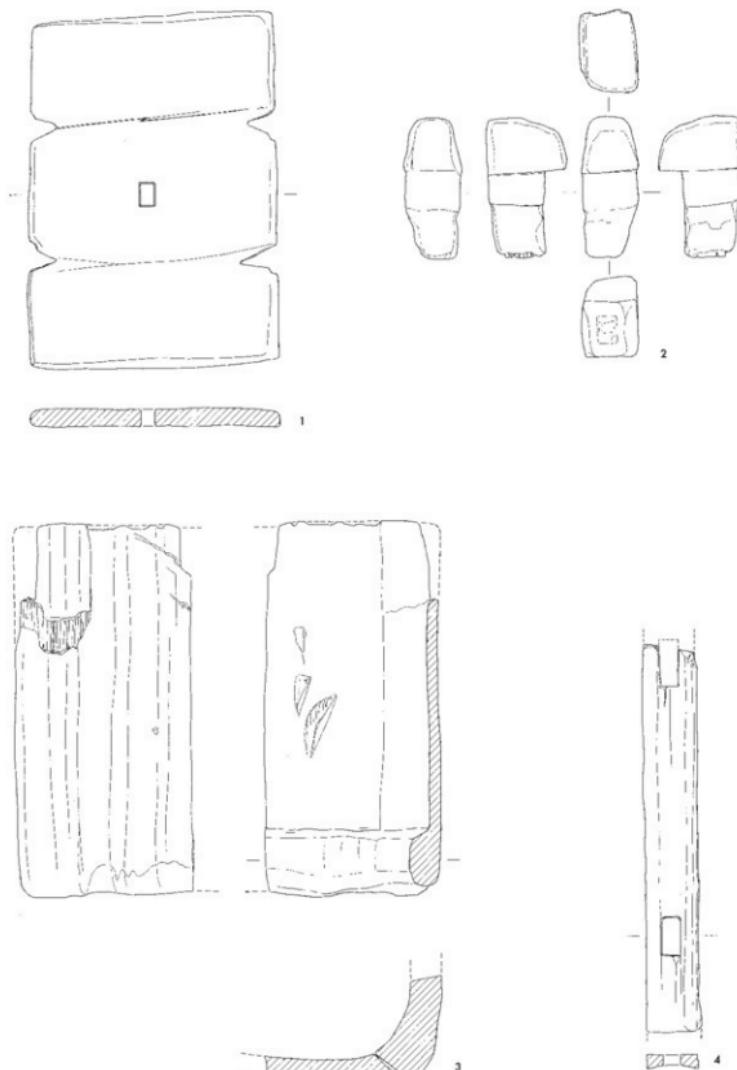
第14図 調査II区出土木製遺物 (1) (1はS=1/2、2~4はS=1/4)



第15図 調査II区出土木製遺物 (2) ($S = 1/8$)



第16図 調査II区出土木製遺物（3）（1～5はS=1/8、6・7はS=1/16）



第17図 調査III区出土木製遺物 (1~3はS=1/4、4はS=1/8)

第5章 自然科学的分析

第1節 五反配遺跡出土木製品の樹種

京都大学木質科学研究所

伊東 隆夫

島根県簸川郡大社町杵築東に所在する五反配遺跡は歴史民俗博物館建設予定地にあたり、調査区からは中世の地割と古墳時代の水田の駐跡と考えられる杭列・矢板列が検出され、さらにその下層からは弥生時代前期から後期初めの溝が検出されている。弥生時代の溝は吉野川の旧河道と推測されているが、土器や木製品や杭などが出土している。古墳時代の駐跡周辺からは飼・鍬・田下駄・木包丁・かけやなどの農具や、容器・杓子・椅子・櫈など多様な木製品が出土している。これら木製品のうち116点につき樹種同定をおこなった。樹種同定の方法は定法にしたがい、安全カミソリで二断面の切片を切り出し、顕微鏡用標本を作製し、通常の光学顕微鏡で観察し、以下に示す樹種同定の拠点に基づいて樹種を特定した。その後、写真撮影をおこない樹種の特徴を記録した。

樹種同定の拠点。

カヤ (*Torreya nucifera*)

樹脂道や樹脂細胞を欠く。仮道管に対にならせん肥厚がみられる。

イヌガヤ (*Cephalotaxus harringtonia*)

樹脂道を欠く。樹脂細胞は散在。仮道管にらせん肥厚。

二葉マツ (*Pinus* sp., *haploxyylon*)

樹脂道が存在。分野壁孔は窓状。放射仮道管に鋸歯状突起。

スギ (*Cryptomeria japonica*)

樹脂道を欠く。樹脂細胞は接線状に点在。分野壁孔はスギ型。

ヒノキ (*Chamaecyparis obtusa*)

樹脂道を欠く。樹脂細胞は接線状に点在。分野壁孔はヒノキ型。

カバノキ属 (*Betula* sp.)

散孔材。大きさが中筋の道管が放射方向に2-5個複合する。確段数の少ない階段穿孔。放射組織は同性で、1-5細胞輪となる。

アカガシ亜属 (*Quercus* sp., *Cyclobalanopsis*)

放射孔材。単穿孔。大型の道管が放射方向にならぶ。

クリ (*Castanea crenata*)

環孔材。年輪のはじめにきわめて大きい道管がならぶ。晩材部では小道管が火炎状に配列する。道管に単穿孔。放射組織は單列同性。

シイ属 (*Castanopsis* sp.)

環孔材。単穿孔。孔圈外で道管は放射方向に火炎状に配列する。単列放射組織。

ケヤキ (*Zelkova serrata*)

環孔材。孔圈道管は1列。単穿孔。孔圈外道管は集団をなして斜線状にならぶ。放射組織に大型の結晶がみられる。

ヤマグリ (*Morus australis*)

環孔材で年輪始めの道管は大きい。單穿孔。道管内にチロースが詰まる。小道管にはらせん肥厚がみられる。放射組織は異性で、1-6列。

クスノキ科 (*Lauraceae*)

散孔材。單穿孔。道管は中庸で油細胞で囲まれる。放射組織は1-3列。

サクラ属 (*Prunus* sp.)

散孔材。やや小さい道管が単独ないし斜線状にならぶ傾向がある。單穿孔。道管にらせん肥厚。放射組織は異性で1-5細胞幅。着色物質がつまる。

ツバキ (*Camellia japonica*)

散孔材。非常に小さい道管がほぼ単独で散在する。階段穿孔。道管にらせん肥厚。放射組織は異性で1-3列。放射組織縁辺の柔細胞に大型の結晶がみられ、柔細胞は膨れて観察される。

ケンボナシ (*Hovenia dulcis*)

環孔材。孔圈外道管は多列。孔圈外道管の壁は厚い。單穿孔。軸方向柔組織は周囲状および翼状。柔細胞に結晶がみられる。放射組織は異性ⅡないしⅢ型。

モチノキ属 (*Ilex* sp.)

散孔材。小さい道管が放射方向に数個複合する。階段穿孔。道管および木繊維にらせん肥厚。放射組織は異性で1-8列。放射組織に大型の結晶がみられる。

非木部組織

植物繊維と思われる細胞が密にならぶ。顯微鏡からは樹木の樹皮あるいは草木種の組織か区別はむずかしいが、少なくとも樹木の木部組織ではない。

樹種同定の結果は表1に示す通りであった。同表から製品別に樹種の使用頻度をまとめると表2の通りである。

表2 木製品別の樹種の使用頻度

円下駄：スギ 14点、ヒノキ 2点

田舟：スギ 1点

天秤棒：ヒノキ 1点

組合式鋤：アカガシ亞属 1点、モチノキ属 1点

鋤：アカガシ亞属 4点

茄子形鋤：アカガシ亞属 1点

曲柄平鋤C：カバノキ 1点

斧直柄：スギ 1点

鎌柄：ツバキ 1点

木包丁：ケンボナシ 1点

盤or合子：スギ 1点

圓脚盤：ヤマグワ 1点

容器：スギ 13点、アカガシ亞属 1点、ヒノキ 1点

脚（高杯）：サクラ属 1点
椅子：スギ 6点
斧直柄：スギ 1点
柄？：ヒノキ 1点
桶：スギ 3点
槽：スギ 1点
底板：スギ 3点
刨物：スギ 1点
刨物桶：スギ 2点
腰掛：スギ 1点
腰掛脚：スギ 1点
箱：スギ 6点、ヒノキ 1点
かけや：アカガシ並属 1点、ケヤキ 1点
網枠：スギ 1点
櫛：スギ 4点
緊縛具：スギ 2点
杓子：イスガヤ 1点、クスノキ科 1点
栓：スギ 2点、クリ 1点
火切臼：スギ 1点
劔輪：スギ 1点
不明：スギ 12点、ヒノキ 3点、シイ属 2点、サクラ属 1点、カヤ 1点
その他：スギ 2点、ヤマグワ 1点、シイ属？ 1点

表2から鋤、鎌、かけや、杓子、天秤棒、高杯、圓脚盤を除く多くの木製品にスギが利用されていた。また、木製品全体（116点）のうち80点、すなわち7割近くにスギが多用されていたことになる。この知見は日本海側の各府県にスギ林が豊富にみられたとする遠山宮太郎氏の見解と符合する（1975）。

参考書

遠山宮太郎：スギのきた道、中公新書、1975.

以上は、平成14年度発掘調査時出土の木製品樹種鑑定結果である。表1の樹種同定結果については、以下の文献中にある観察表にその成果が掲載されているため、ここでは表1を省略している。

（編集者付記）

島根県教育委員会2001『島根県簸川郡大社町 五反配遺跡 古代出雲歴史博物館建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』

第2節 五反配遺跡発掘調査における自然科学分析（2）

渡辺 正巳（文化財調査コンサルタント株式会社）

はじめに

五反配遺跡は島根県中央部、簸川郡大社町（平成17年3月22日出雲市合併）杵築東に立地する遺跡である。本報は遺跡周辺の古環境推定を目的として、島根県教育庁埋蔵文化財調査センターが文化財調査コンサルタント（同）に委託して実施した自然科学分析（花粉分析およびプラント・オパール分析）報告書をまとめ直したものである。また、同遺跡内ではすでに渡辺（2000a）が報告済みであるが、本報はこれを補完・修正するものである。

分析試料および分析方法

13T～15T（図7）の各地点で、新たに試料採取・分析を行った。各地点の地質図状況および試料採取深度は、図1～3に示すとおりである。また、図7中のNo.1～4地点は渡辺（2004a）において、TS01～TS03は渡辺（2004b）において報告済みの分析地点である。

花粉分析、プラントオパール分析の処理および検鏡方法は、渡辺（2004a）に準じて行った。

花粉分析結果および局地花粉分帶の設定

花粉分析結果を図1～3、プラントオパール分析結果を図4～6に示す。それぞれのダイアグラムの記載方法も渡辺（2004a）に準じた。また、それぞれの花粉ダイアグラム中に局地花粉帯を示している。五反配遺跡近辺では、渡辺（2004a, b）が公表されている。今回の報告では、両者の内より広範囲で対象時期の長い渡辺（2004b）で設定した局地花粉帯に準じて、局地花粉帯を設定した。また、渡辺（2004b）との整合性をとるために、渡辺（2004a）の局地花粉帯に変更を加えている（花粉帯の変更結果を図7の断面図中に示す。）。

植生変遷

各局地花粉帯毎に、遺跡周辺の古環境を推定する。

(ア) VI带期

① 年代：TS01、03での年代測定結果より、およそ6000～5000yr. B.P.頃の植生を示すと考えられる。② 堆積環境：TS01、03の化学分析結果から、この時期の調査地点は広義の「神門水海」（汽水）の沿岸部に位置していたと考えられている（高安、2004）。両地点に比べ北山側に近い15TではVI帶の分布高さが高く、草本花粉（特にガマ属）の割合が高い。これらのことから、T15は吉野川の河口であったために淡水環境が強く、水深もTS01、03に比べ浅かった（おそらく数10cmまで）、と考えられる。

③ 古植生：

花粉組成でアカガシ並木が卓越することから、北山（弥山）山地や対岸の中岡山地低所にはカシ類を主要要素とする照葉樹林が広く分布していたことが推定される。また、付隨種の出現傾向からクロマツ海岸林が岸辺近くに、ナラ類とアカマツなどが混交する遷移林が北山（弥山）山地に点在し、ニレ科を主要要素とする河畔林が北山（弥山）山地から流れ出る小河川沿いに分布していたと考えられる。また、T15でガマ属花粉が顕著に出現することから、岸辺にガマ（あるいはコガマ、ヒメガマ）の繁茂する湿地が広がっていたと考えられる。

(イ) V带期

① 年代：TS01、03での年代測定結果より、およそ5000～3500yr. B.P.頃の植生を示すと考えられる。

② 堆積環境：TS01、03の化学分析結果から、この時期は「神門水界」縁辺の塩性湿地で堆積したと考えられている（高安、2004）。のことから、微妙な水位の変化（湿地の広がりの変化）があり、塩性湿地近辺での植生の変化が激しかったと考えられる。

③ 古植生：近辺での堆積環境の変化が激しかったため、花粉組成の変化として現れるアカガシ亜属とマツ属（複雑管束亜属）、スギ属間の卓越種変化は、遠方の植生要素（カシ類）が近辺の植生要素（マツ類、スギ）の盛衰の影響を受け、相対的に減少したために起こったと考えられる。マツ属（複雑管束亜属）花粉やスギ属花粉の増減を局所的な現象と考えると、c～a亜帯への変化は各地点同時に起こらなかった可能性も指摘される。しかし、以下ではc～a亜帯への変化が広範囲な植生変化を示すと考え古植生を推定する。

北山（弥山）山地や対岸の中田山地低所の植生には、前時期のⅢ帯期に比べ大きな変化は認められず、カシ類を主要要素とする照葉樹林が広く分布していたことが推定される。調査地点近辺に広がっていた塩性湿地周辺にはクロマツ海岸林のはか、スギ林が分布するようになったと考えられる。また引き続き、北山（弥山）山地から流れ出る小河川沿いにはニレ科を主要要素とする河畔林が分布していたと考えられる。一方、塩性湿地内にはアン（イネ科）やカヤツリグサ科などの好塩性の草本が入り、b亜帯期を中心として塩性湿地縁辺の淡水域にガマ類が繁茂したと考えられる。

(v) Ⅳ帯期

① 年代：TS01、03での年代測定結果より、およそ3500～1000yr.B.P.頃の植生を示すと考えられ、上部のa亜帯は渡辺ほか（2003）のシイ・カシ帶・スギ亜帯に相当すると考えられる。

② 堆積環境：TS01、03の化学分析結果から、下部のb亜帯の大部分は前時期から引き続き塩性湿地であったと考えられている（高安、2004）。一方b亜帯上部からa亜帯にかけては淡水環境であり、イネ科（40ミクロン以上）花粉の含有量が多く、イネのプラント・オバールも検出できることから水田域であったと考えられる。a亜帯上部から上位のⅢ帯あるいはⅡ帯にかけてはイオウ濃度が不安定で、塩害の可能性も指摘されている（高安、2004）。しかし、埋土や施肥など人間活動による影響も否定できない。13Tの7、9層は、河川状に続く凹地を埋める堆積物であったが、同時期の他地点の堆積物から得られた分析結果と有意な差のある結果は得られなかった。

③ 古植生：この時期は、従来の研究から、いわゆる「弥生の小海退期」に相当し、冷涼化、多雨化に起因して、全国的に山間の低地のみならず沖積平野にまでスギが広く分布していたと考えられている。今回の分析結果でもスギ属花粉が急増し、北山（弥山）山地や対岸の中田山地低所の谷沿い斜面を主として、スギの分布が急激に拡大した可能性が高い。一方でアカガシ亜属花粉は減少傾向を示し、カシ類を主要要素とする照葉樹林の分布域の縮小も考えられる。しかし、スギが調査地近辺で増加した事による相対的な現象である可能性も指摘できる。一方、低地部でのスギ（林）の拡大によって、分布域が一部重なるであろうクロマツ海岸林や、ニレ科を主要要素とする河畔林は若干縮小したと考えられる。しかし、地点毎に様相が異なり、詳細を述べるためにには、さらなる精査が必要である。一方調査を行った各地点のうち、スギ属花粉の出現率は15Tで最も高く、TS03、14Tに向かい減少することから、15Tがスギ分布の中心に近かった可能性が指摘できる。あるいは吉野川沿いにスギ林が分布していた可能性も指摘できる。ただし、スギ属花粉出現率の高低は局地的な現象ではなく、各地点毎に若干の時期差があり、スギ属花粉の増減過程を断片的に示している可能性も若干残る。前述のように、前半のb亜帯期の大部分は前時期から引き続き塩性湿地であったと考えられており、塩性湿地内には前時期と同様にアン（イ

ネ科) やカヤツリグサ科などの好塩性の草本が繁茂していたと考えられる。一方 a 帯ではイネ科(40ミクロン以上) 花粉の出現率が急増し、イネのプラント・オパールも検出できることから水田域であったと考えられる。

(c) III帯期

① 年代：出土遺物から占墳時代～中世頃の植生を示すと考えられるほか、TS02では鎌倉時代を示す¹⁴ C年代が得られており、発見された鎌倉本殿の時期に近い。

② 堆積環境：イネ科(40ミクロン以上) 花粉の含有量が多く、イネのプラント・オパールも検出できることから水田域であったと考えられる。

③ 古植生：N 帯に比べスギ属花粉の出現率が低下し、調査地近辺のスギが減少した事が判る。この時期にスギ属花粉が減少し低率になる傾向は、出雲平野のいくつかの遺跡（例えば三田谷 T 遺跡）でも報告されている（渡辺、2000）。この時期は、出雲平野の開発が盛んになった時期でもあり、有用材としてのスギの伐採、およびスギの生育していた低地の開発によりスギを主要素とした森が減少していったことが原因と考えられる。一方、スギ花粉の減少に伴いマツ属（複雑管束亞属）、アカガシ属、コナラ属の花粉が顕著になる傾向にあるが、おそらく相対的な増加であり、それそれを主要素とする森が広がったとは考えにくい。また前述のようにイネ科(40ミクロン以上) 花粉が卓越し、イネのプラント・オパールも検出できることから水田域が広がっていたと考えられる。

(d) II 帯

① 年代：マツ属（複雑管束亞属）花粉が卓越し、他の木本花粉はほとんど検出されない。大西（1993）のイネ科花粉帶マツ帯に対比可能であり、AD1500～1900年頃の植生を表していると考えられる。

② 堆積環境：イネ科(40ミクロン以上) 花粉の含有量が多く、イネのプラント・オパールも検出できることから水田域であったと考えられる。

③ 古植生：調査地近辺の北山（弥山）山地には、現在見られるようなアカマツやナラ類を中心とするいわゆる「弥山」が分布するようになったと考えられる。イネ科(40ミクロン以上) 花粉が卓越し、イネのプラント・オパールも検出できることから水田域が広がっていたと考えられる。また、地点によりソバ属花粉も検出され、ソバ栽培も行われていたと考えられる。

(e) I 帯

今回の分析では I 帯に相当する花粉帶が得られなかったが、近隣のTS03において得られていた。ここでは、TS03を基に考察する。

① 年代：マツ属（複雑管束亞属）花粉が卓越しスギ属花粉を作りなど、大西（1993）のイネ科花粉帶マツ・スギ帯に対比可能であり、AD1900年頃以降の植生を表していると考えられる。

② 堆積環境：イネ科(40ミクロン以上) 花粉の含有量が多いことから、水田域であったと考えられる。

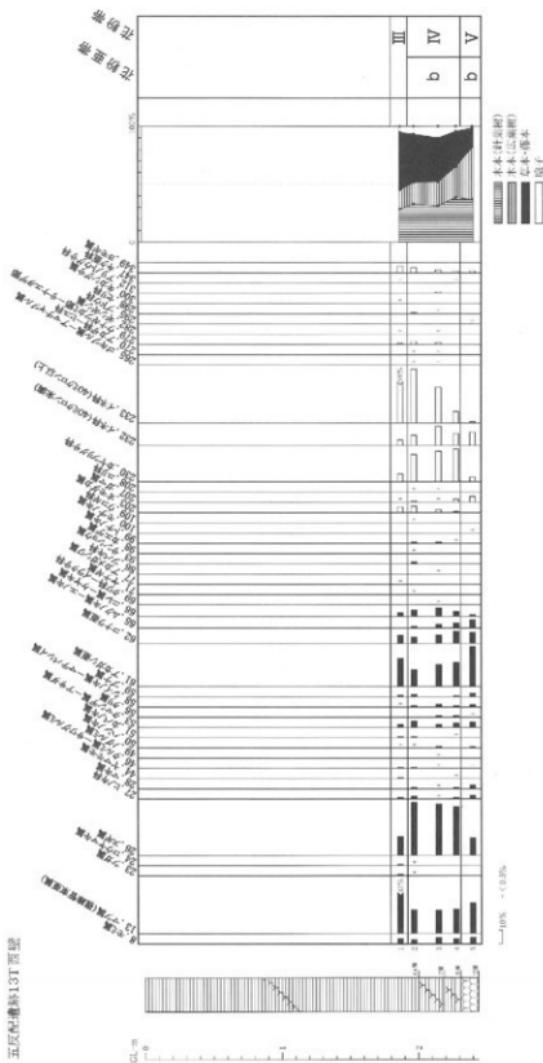
③ 古植生：現在あるいは、ごく最近まで見られた北山（弥山）山地の景観が表されていると考えられる。スギ属花粉の増加は、特に太平洋戦争後に積極的に行われたスギ植林に影響であると考えられる。が増加する。他の木本花粉はほとんど検出されない。引き続きイネ科(40ミクロン以上) 花粉が卓越し、TS03近辺は引き続き水田耕作が行われていたと考えられる。また、II 帯に比べ検出草本花粉の種類数が減少し、水田雜草が減少した可能性が指摘され、II 帯期に比べより管理的な農作業が行われていたと考えられる。農薬使用など、技術発達の成果である可能性がある。

まとめ

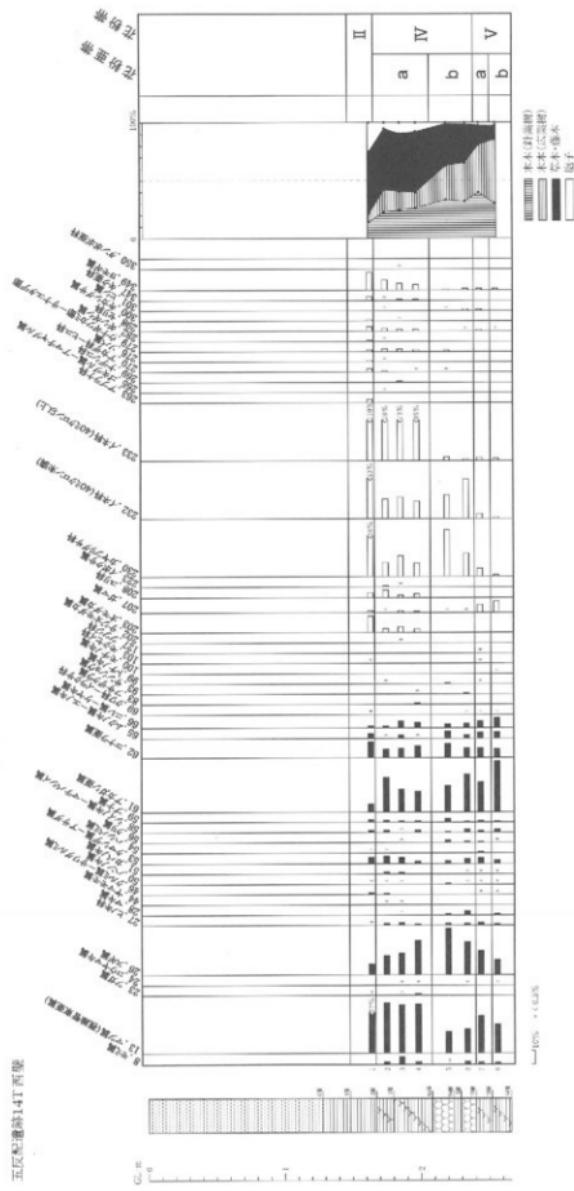
- 五反配遺跡での花粉分析、プラント・オパール分析を基に、以下の事柄を行った。
- (ア) 渡辺(2004)の局地花粉帯と比較検討し、Ⅵ～Ⅲ帶の5花粉帯を設定した。さらにⅤ帶、Ⅳ帶をそれぞれb、a帯に細分した。また、内部資料である文化財調査コンサルタント株式会社(2003)のNo1地点で設定した五反配遺跡での地域花粉帯を再設定した。
- (イ) 渡辺(2004)の分析結果のうち五反配遺跡近辺でのTS01、TS03、文化財調査コンサルタント株式会社(2003)のNo1地点、および今回の3地点の分析結果を基に、五反配遺跡での花粉層序断面図を作成した。
- (ウ) 今回設定した局地花粉帯、花粉層序断面図と、高安(2004)で報告されたTS01、TS03の化学分析結果および解析結果を基に五反配遺跡近辺での古環境変遷を推定した。特筆すべき点は、以下の事柄である。
- ① Ⅵ帶の分布密度は5地点の中で15Tが最も高く、近辺にガマ(あるいはコガマ、ヒメガマ)の生育する淡水湿地が存在したと考えられる。15Tが最も奥まった地点にあることから、吉野川の河口に位置し淡水環境が強く水深も浅かったと考えられる。
- ② Ⅳ帶のスギ属花粉の出現率分布に、15T、TS01(陸側)が高く、14T(水域側)が低いという傾向性が認められた。このことからスギの分布中心が15Tの近辺、あるいは吉野川沿いであった可能性が示唆される。
- ③ イネ科(40ミクロン以上)花粉、イネプラント・オパールの出現傾向から、近辺が水田化するのはⅢ帶a帯帯期以降であったと考えられる。
- ④ 出雲平野内で認められるように、中世頃からスギ花粉が低率となり、マツ属(複雑管束葉属)花粉が卓越するようになる。有用材としてのスギの伐採、およびスギの生育していた低地の開発によりスギを主要要素とした森が減少していったことが原因と考えられる。

引用文献

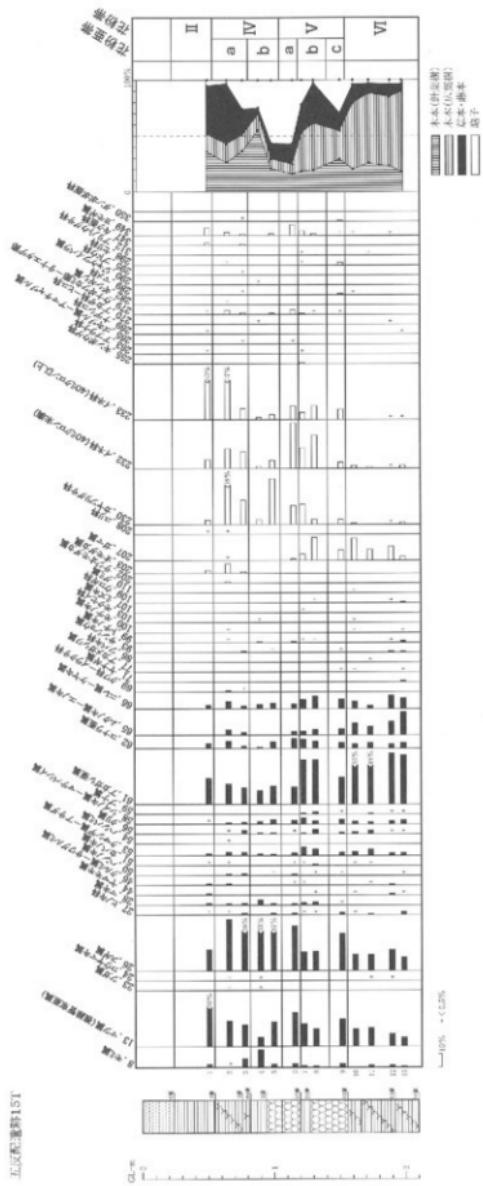
- 大西郁夫(1993) 中海・宍道湖周辺地域における過去2000年間の花粉分带と植生変化、地質学論集, 39, 33-39.
- 高安克己(2004) 地質コア分析結果と周辺の環境変遷に関する考察、山陰人社境内遺跡、359-378. 大社町教育委員会、鳥根県。
- 小村 純(1974) イネ科花粉について、とくにイネを中心として、第四紀研究, 13, 187-197.
- 渡辺止巳・佐伯純也・平木裕子(2003) 日久美遺跡発掘調査における花粉層序の成果、鳥取地学会誌, 7, 1-9.
- 渡辺止巳(2004a) 五反配遺跡発掘調査における自然科学分析、五反配遺跡、古代山陰歴史博物館建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書、15-22. 大社町教育委員会、鳥根県。
- 渡辺止巳(2004b) 山陰人社近辺の古植生、出雲大社境内遺跡、379-384. 大社町教育委員会、鳥根県。



第18図 13Tの花粉ダイアグラム

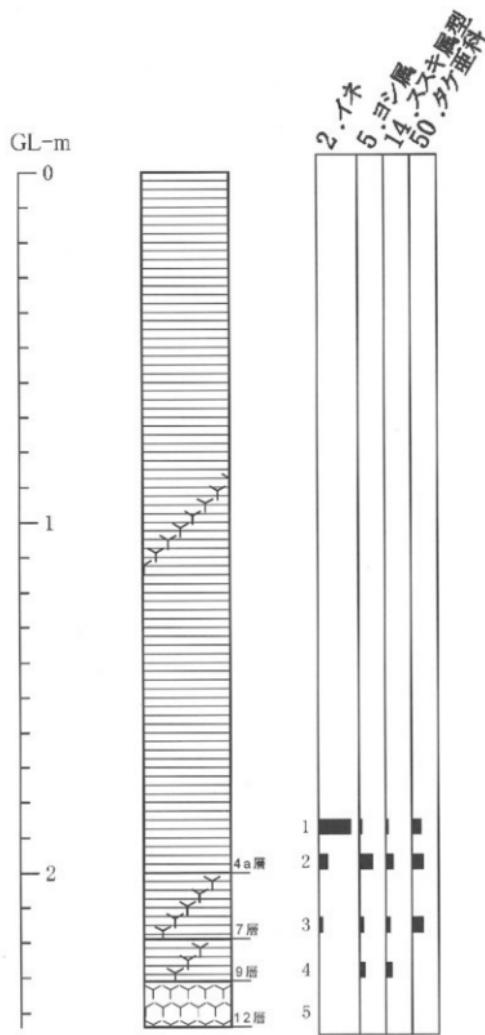


第19図 14Tの花粉ダイアグラム



第20図 15Tの花粉ダイアグラム

五反配遺跡13T西壁

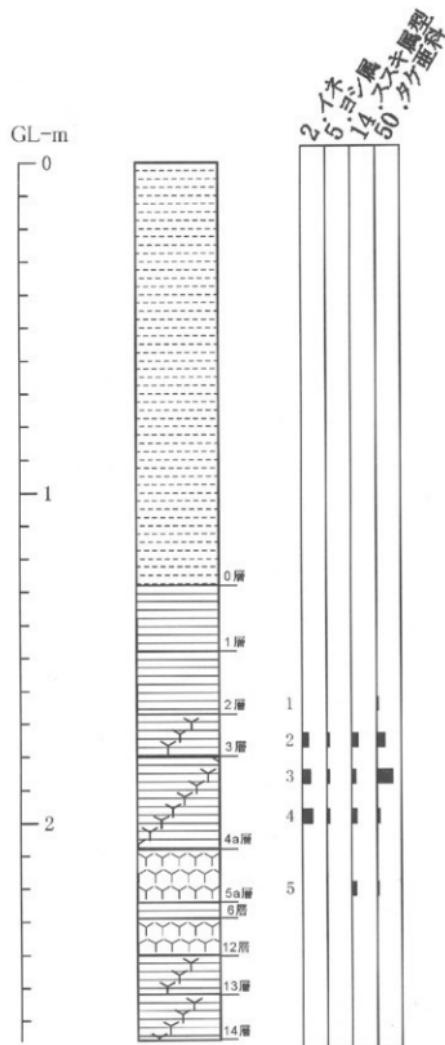


— 10000/g

+ : < 500/g NUMBERS:/100

第21図 13Tのプラント・オパールダイアグラム

五反配遺跡14T 西壁

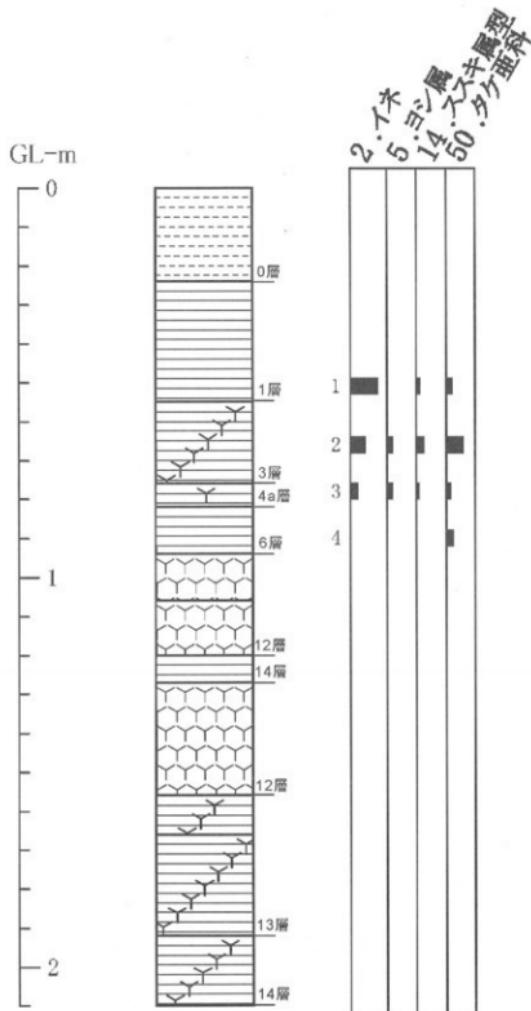


— 10000/g

+ : < 500/g NUMBERS:/100

第22図 14Tのプラント・オパールダイアグラム

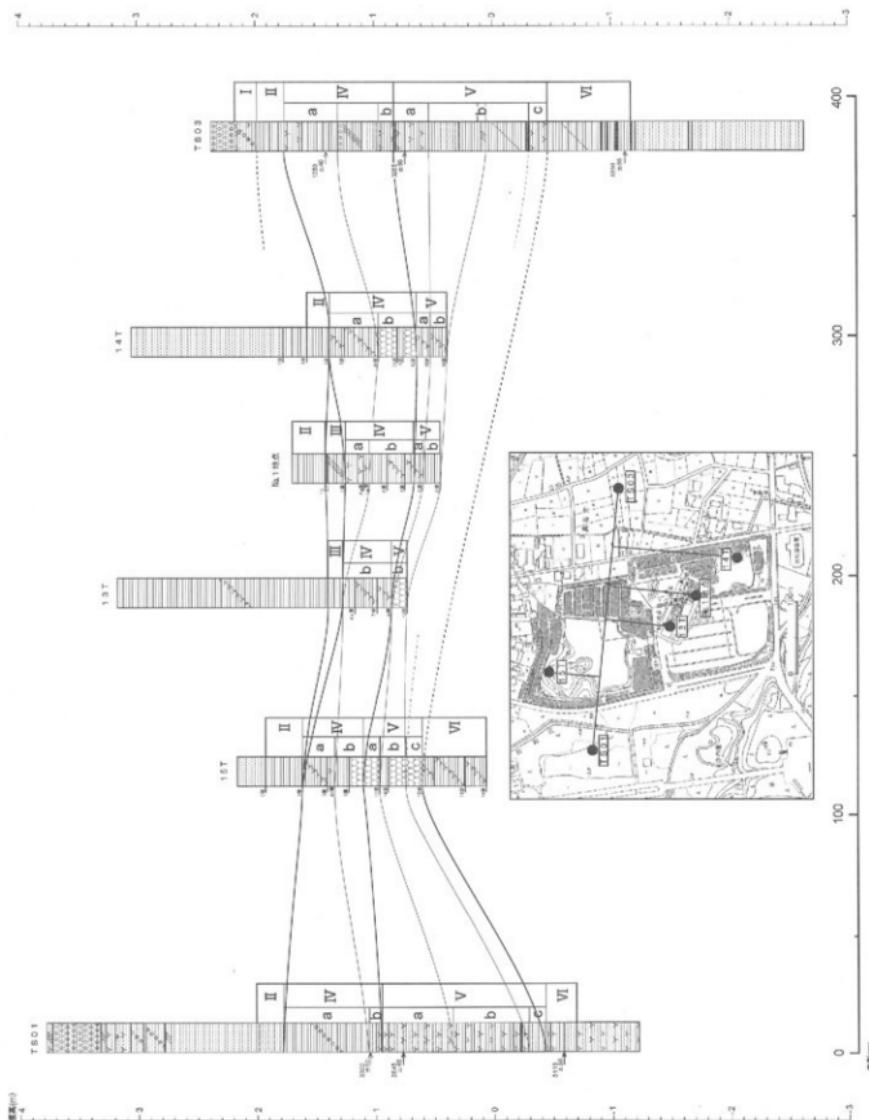
五反配遺跡15T



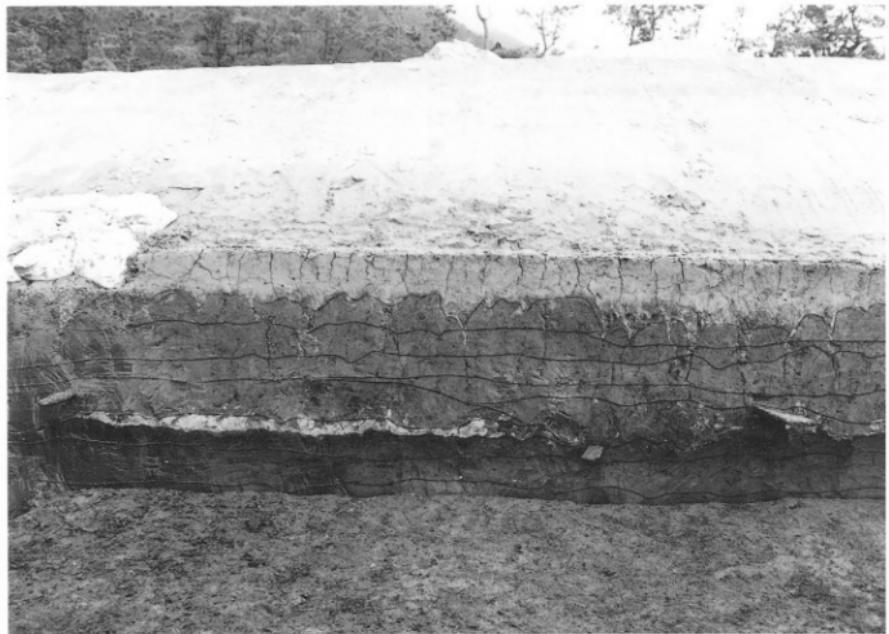
— 10000/g

+ : < 500/g NUMBERS:/100

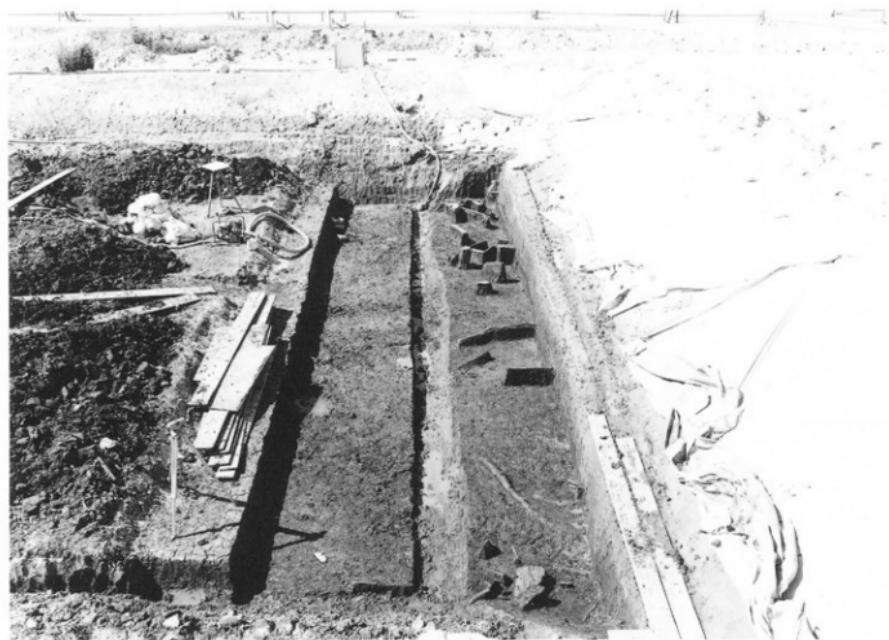
第23図 15Tのプラント・オパールダイアグラム



第24図 五反配遺跡周辺の花粉層序



I区 東壁土層



I区 木製遺物出土状況（南から撮影）



II区 溝内木組（杭列）検出状況（南東から撮影）



II区 同精査後（南東から撮影）



II区
溝・河道精査後
(南東から撮影)



II区 溝・河道精査後（拡大）（南東から撮影）

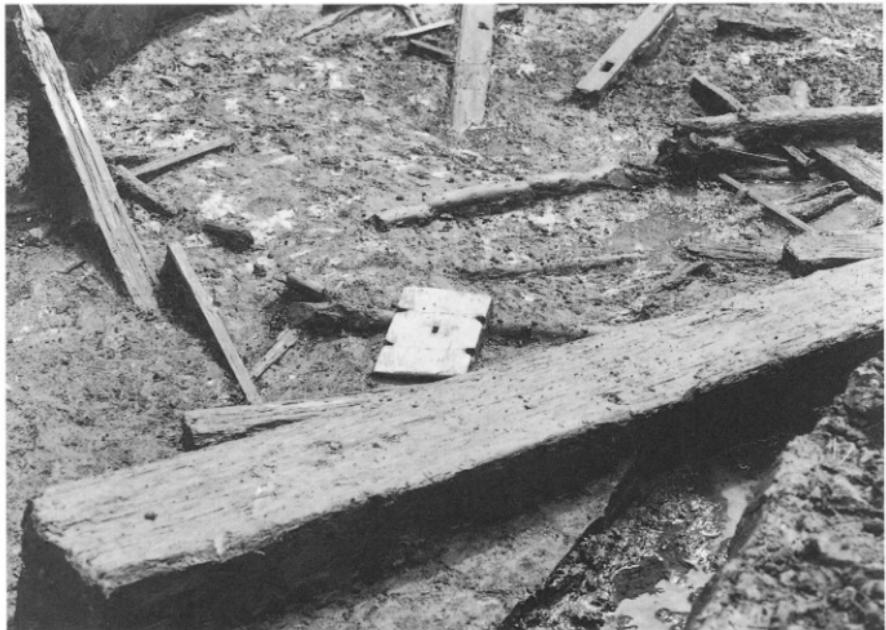
図版4



II区 溝内出土木製什器出土状況（東から撮影）



III区 河道内木製造物出土状況（南西から撮影）



Ⅲ区 河道内木製造物出土状況（北から撮影）



Ⅲ区 精査・完掘後（南から撮影）



13-1



13-2



14-3



14-4



14-4



14-2



14-1



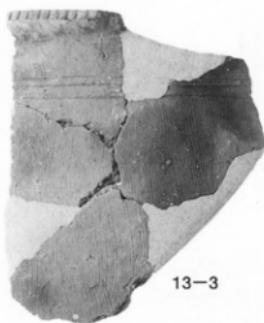
13-8



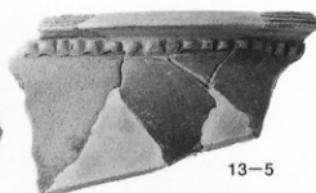
15-6



15-8



13-3



13-5



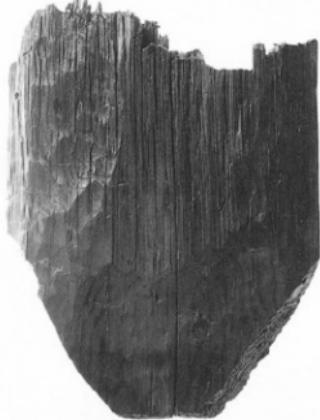
13-4



13-6



13-7



II区 出土遺物 (1)



16-1



16-2



16-3



16-4



16-5



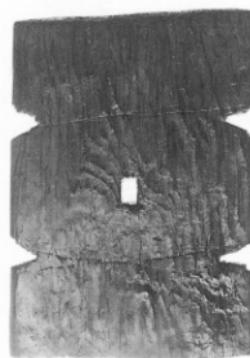
16-6



16-7



16-6



17-1



16-7



17-3



17-4



17-2

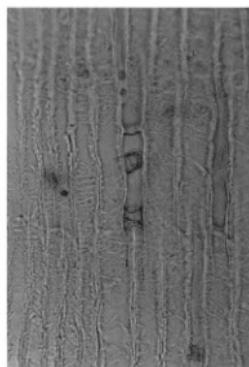
五反配遺跡出土木製品の顕微鏡写真 (1)



1. KK-389
樹皮 非木部 $\times 300$



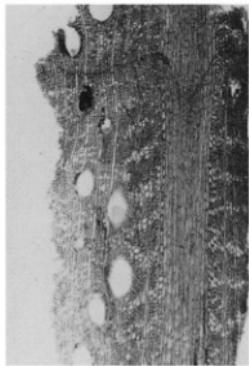
2. KK-390
木包丁 ケンボナシ $\times 85$



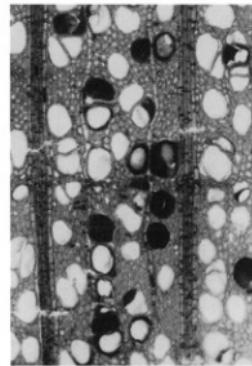
3. KK-396
杓子 イヌガヤ $\times 300$



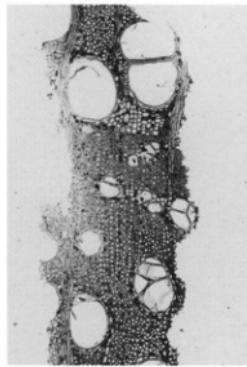
4. KK-397
鎌柄 スパキ $\times 150$



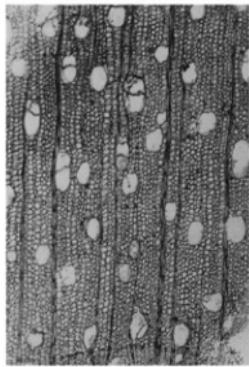
5. KK-398
鋤 アカガシ亜属 $\times 40$



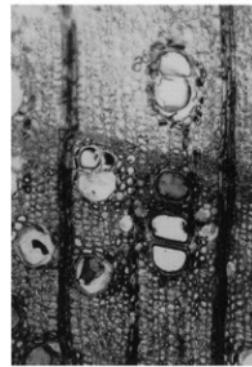
6. KK-399
不明 サクラ属 $\times 75$



7. KK-404
圓脚盤 ヤマブク $\times 40$



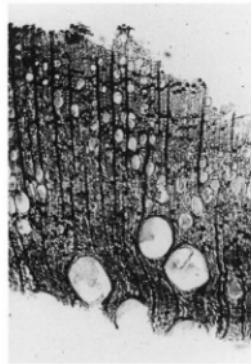
8. KK-425
曲柄平鋤C カバノキ属 $\times 40$



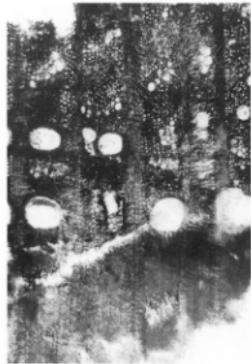
9. KK-432
杓子 タブノキ? $\times 75$



10. KK-433
不明 カヤ $\times 150$



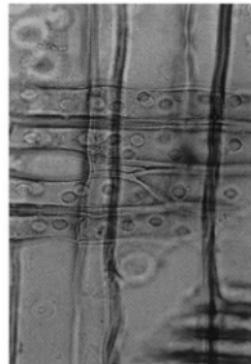
11. KK-450
栓 クリ $\times 40$



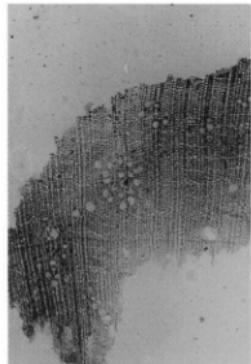
12. KK-453
カケヤ ケヤキ $\times 40$



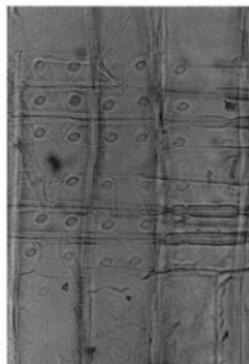
13. KK-456
組合式鉤 モチノキ属 $\times 40$



14. KK-460
容器 スギ $\times 300$



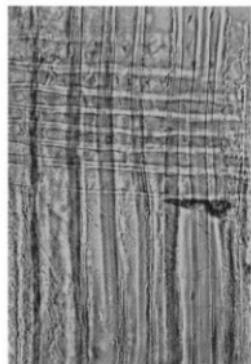
15. KK-474
不明 シイ属 $\times 40$



16. KK-489
箱 スギ $\times 40$



17. KK-493
カケヤ 二枚マツ $\times 300$



18. KK-501
容器 ヒノキ $\times 300$

報告書抄録

フリガナ	ゴタンバイイセキ							
書名	五反配遺跡（平成16年度調査）							
副書名	古代出雲歴史博物館建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編集者名	仁木聰・伊東隆大							
編集機関	島根県教育厅埋蔵文化財調査センター							
所在地	〒690-0131 島根県松江市打出町33番地 Tel.0852 36-8608㈹ E-mail : maibun@pref.shimane.lg.jp							
発行年月日	西暦 2005年3月31日							
所収遺跡名	コード		※ 座標		調査期間	調査面積	調査原因	
	所在地	市町村	遺跡番号	北緯				東経
五反配	島根県 山陰市 大社町	32-405	42	35°23'41"	132°41'27"	20040707 ～ 20040830	400m ²	博物館 建設に 伴う 発掘調査
遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
五反配	水田跡	弥生時代 古墳時代	河道 溝 木組遺構	弥生土器 須恵器 木製品 金玉器	<ul style="list-style-type: none"> • 弥生時代を上限とする河道 • 古墳時代の水田遺構 • 弥生時代～古墳時代の木製品 			

島根県出雲市大社町
五 反 配 遺 跡
(平成16年度調査)

古代出雲歴史博物館建設予定地内
埋蔵文化財発掘調査報告書

平成17年3月31日発行

発行 島根県教育委員会

印刷 柏木印刷株式会社